

第4章 吉田構内第2学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査

第1節 事前調査

1 調査の経過

平成6年度に吉田構内の第2学生食堂の増築及び改修工事が計画され、埋蔵文化財資料館運営委員会が審議した結果、試掘調査が必要との判断が下された。上記を受け、埋蔵文化財資料館が平成7年7月24～8月17日に試掘調査を実施した。試掘調査は食堂の東側にAトレンチ、南側にBトレンチを設定して行った（Fig. 33）。調査の結果、Aトレンチでは遺物包含層はなく、現地表下約60cmで遺構面を検出した。また、顕著な遺構は認められず、土師器や須恵器などの遺物が少量出土するにとどまった。Bトレンチでも遺物包含層はなかったが、トレンチ北部では現地表下約60cmの遺構面上で柱穴を2基検出した。また、柱穴埋土から須恵器・石鏃も出土した。一方トレンチ南部では旧地形を斜方向に削平していることが確認されたため、周辺では遺構が残存する可能性が低いと推測された。ただし、Bトレンチ北部で検出された2基の柱穴は竪穴住居跡もしくは掘立柱建物跡の柱穴とみられ、調査区外に未検出の柱穴が存在する可能性が高いと推測された。上記の調査結果について埋蔵文化財資料館運営委員会が審議した結果、Bトレンチで検出された柱穴に伴う遺構の平面プランと関連する遺構の分布を確認するため、事前調査が必要であるとの判断が下された。

その後、平成10年度補正予算で予算措置され、計画が具体化したことから事前調査を実施することになった。調査期間は平成11年1月18～28日、2月9～5月20日で、調査面積は716.3㎡である。調査前の食堂には建物南側にテラス・植樹があり、空閑地は南側へ傾斜していた（PL. 23）。試掘調査の結果から、遺構が希薄であることが推測されたため、テラス・植樹を避け、A～Dトレンチを設定した。Fig. 32・33



Fig.32 調査区位置図

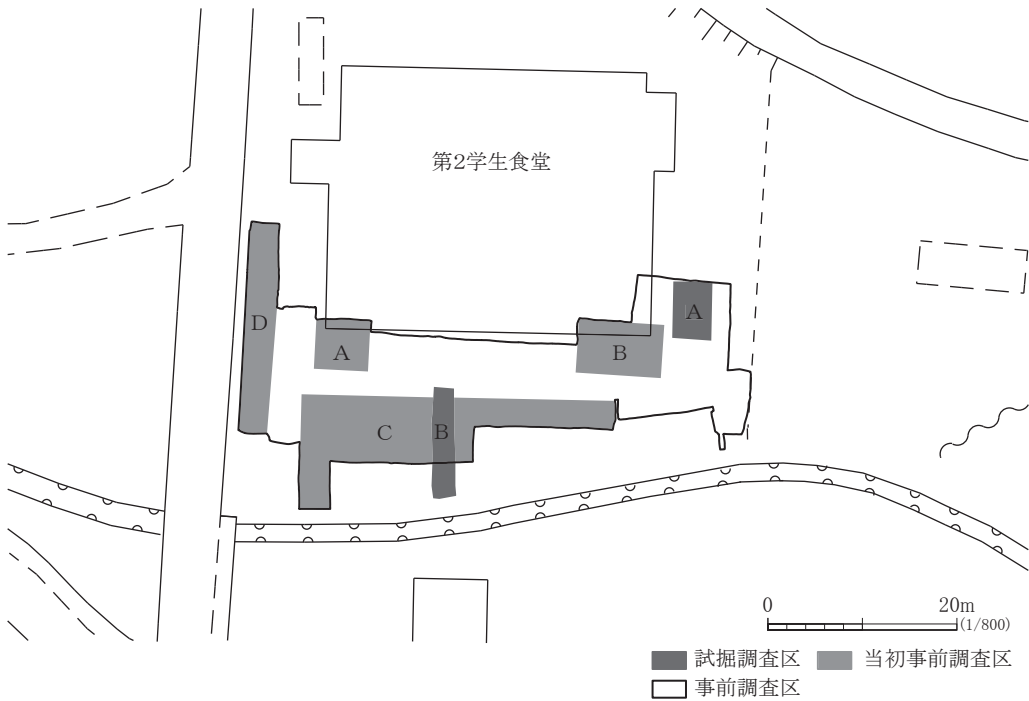


Fig.33 調査区設定図

では建物と調査区が一部で重複するが、上記は調査区が建物基礎に近接するのに対して、Fig. 32・33では建物が底を含めて平面的に図化されているためである。1月18日より調査を開始した結果、A・B・Dトレンチでは遺構が希薄であったが、Cトレンチ西部では遺物包含層、溝（SD1）を確認し、調査区外にも広がっていることが確認された。このため、工事計画の変更・保存の可能性について担当部局と協議を行った。しかし、本工事は建物増築という性格上、工事計画の変更は困難であるため、記録保存を目的とした全面調査に切り替えることになった。上記を受け、作業員を増員して2月9日から全面調査を実施した。調査時は食堂が営業中で各種配管を残す必要があったため、テラス・植樹の撤去やその後の遺構掘削に多大な支障が生じたが、調査区西部から調査を進めて4月14・15日に空撮・写真測量を行った。調査区の大半は4月27日までに埋め戻し、4月28日に埋蔵文化財資料館運営委員会で調査結果が諮られ、承認された。また、調査区南東隅では敷地内でさらに遺構が広がる状況が確認されたため、工事と並行して5月20日まで追加調査¹⁾を行った。調査期間の大半は前章報告の小串構内の調査と重複したこともあり、5月中旬は館員全員が発掘調査に従事する事態となった。調査終了後、6月1日に埋蔵文化財資料館運営委員会に調査報告を行い、同日記者発表も行った。

2 基本層序 (Fig.34 ~ 36, PL.27・28)

第2学生食堂敷地は姫山の北から南へ延びる支脈である通称「もり山」の南端部の緩傾斜面で、統合移転前は棚田であった。第2学生食堂付近は吉田遺跡調査団によって第1地区E区とされ、発掘調査を経て造成工事が行われた。今回調査区は調査前まで食堂南側のテラス・植樹帯・空閑地であった。

基本層序は第Ⅰ層:表土、第Ⅱ層:造成土、第Ⅲ層:水田耕土、第Ⅳ層:水田床土、第Ⅴ層:遺物包含層、第Ⅵ層:弥生時代以降の遺構面形成層である。調査区は北から南へ傾斜する地形である。第Ⅰ・Ⅱ層の層厚は5～120 cmで、遺構検出面である第Ⅵ層上面の標高は約23.25～22.25 mである。第Ⅵ層の層厚と断面図記載以外の第Ⅵ層の記載は省略する。

調査区西端(当初調査Dトレンチ A-B断面、C-D断面)では、構内道路造成に伴う削平により、東から西側へ傾斜する。第Ⅱ層以下は一部で第Ⅲ-1層が残存していたが、主に第Ⅵ-1層(黄褐色粘質土)、第Ⅵ-2層(明赤褐色(5YR5/8)土)、第Ⅵ-3層(黄橙色(10YR8/8)粘質土)が検出された。

既設建物南西側(当初調査Cトレンチ北西部～SD1間)の第Ⅲ層以下の層序は、第Ⅲ-1層(緑灰色(5G6/1)土 層厚3～9 cm)、第Ⅴ-1層(褐灰色(10YR6/1)土 層厚6～13 cm)、第Ⅵ-2層(明赤褐色(5YR5/8)土)である。第Ⅴ-1層は部分的にSD1の上面にも堆積しており、層中より須恵器、土師器埴、青磁、白磁片等が出土した。また、同層を検出面として土坑を2基検出した。第Ⅵ-2層上面は鉄・マンガン沈着が顕著で遺構検出に困難をきたしたが、多数の遺構を検出した。また、SD1上層上面でも中・近世の柱穴・土坑を検出した。一方南半は削平が著しく、第Ⅱ層直下が第Ⅵ-3層(黄橙色(10YR8/8)土)で、同層上面でピットを少数検出するにとどまった。

既設建物南側隣接部(当初調査A～Bトレンチ間)の第Ⅲ層以下の層序は第Ⅲ-2層(緑灰色(5G5/1)粘質土 層厚12～37 cm)・Ⅲ-3層(にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト 層厚49～60 cm)、第Ⅵ-4層(黄色(2.5Y8/8)粘質土)である。第Ⅴ層はなく第Ⅲ-3・4層直下では部分的に第Ⅳ-1層(浅黄色(5Y7/4)粘質土 層厚3～9 cm)が検出された。また、当初Cトレンチ東部では第Ⅱ層の直下が第Ⅵ層であった。

既設建物東側隣接部(試掘調査Aトレンチ周辺)の第Ⅲ層以下の層序は、第Ⅲ-4層(緑灰色(7.5GY6/1)粘質土 層厚10～24 cm)、第Ⅵ-5層(黄橙色(7.5YR7/8)粘質土)・第Ⅵ-6層(にぶい黄橙色(10YR7/4)粘質土)である。既設建物南側・東側隣接部で検出された遺構は近世以降の水田関連遺構が目立ち、中世以前の遺構の分布は希薄であった。

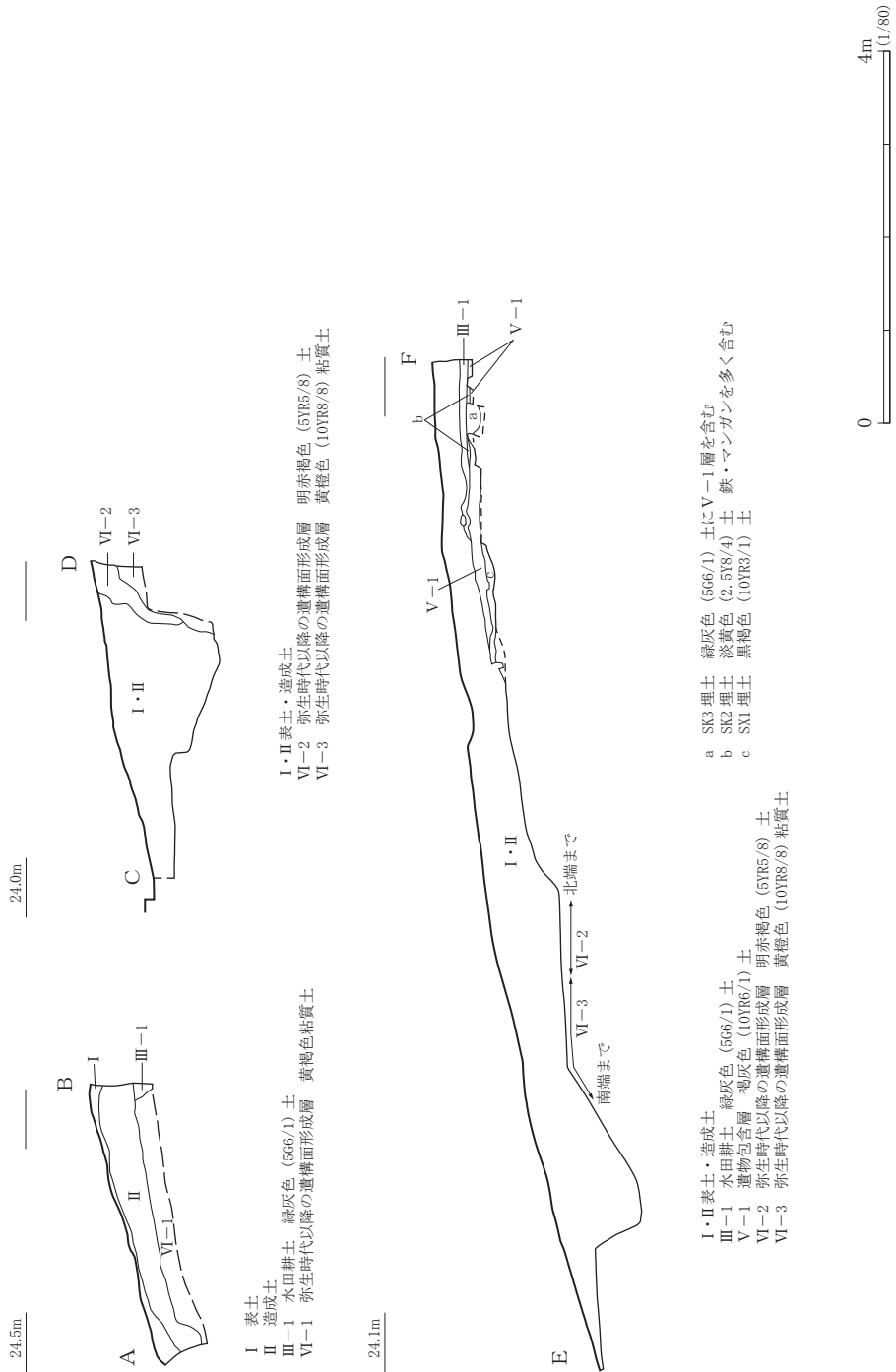
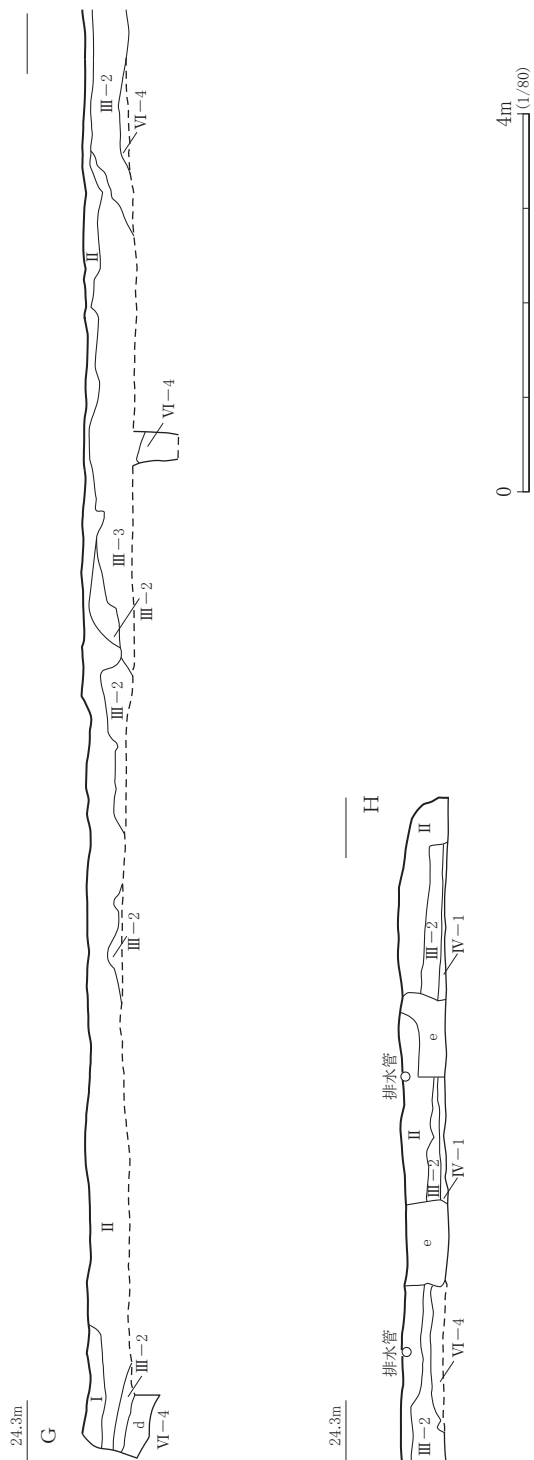


Fig.34 調査区土層断面図①



- I 表土
- II 造成土
- III-2 水田耕土 緑灰色 (5G5/1) 粘質土
- III-3 水田耕土 にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト
- IV-1 水田耕土 淡黄色 (5Y7/4) 粘質土
- VI-4 弥生時代以降の遺構面形成層 黄色 (2.5Y8/8) 粘質土
- d SD1 埋土 黒褐色 (10YR2/3) 土
- e 吉田遺跡調査団トレンチ II層に黄色 (2.5Y8/8) 粘質土ブロックを含む

Fig.35 調査区土層断面図②

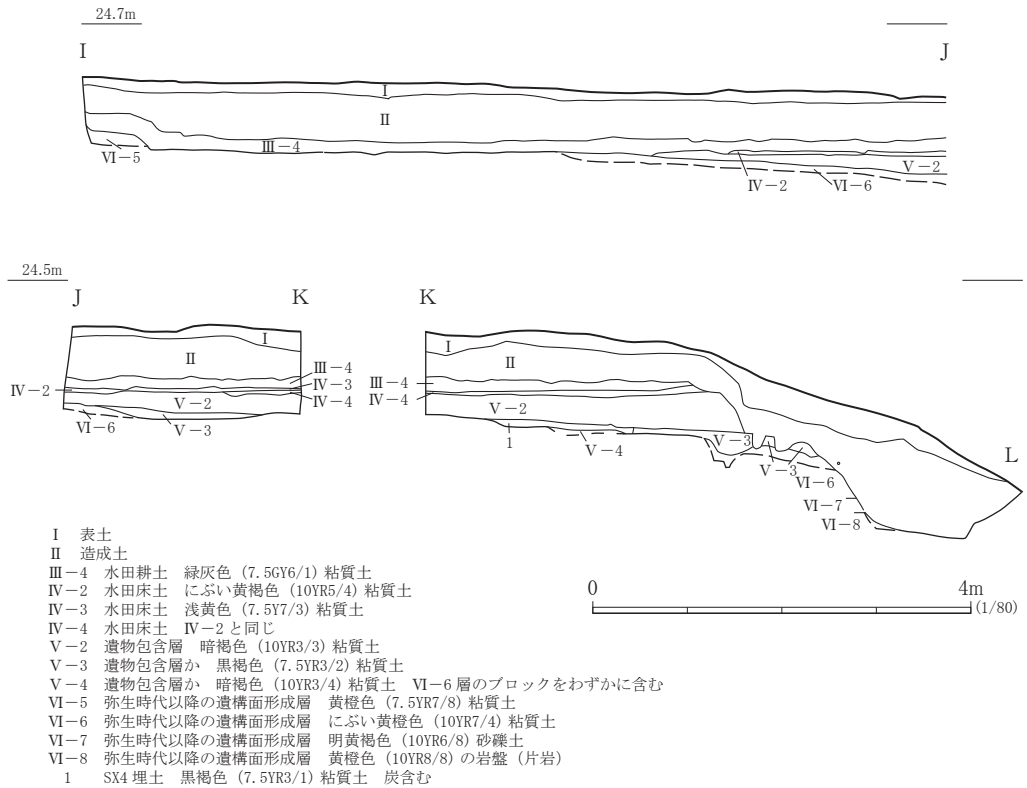


Fig.36 調査区土層断面図③

恐らく、水田造成時に削平を受けたと考えられる。

調査区南東部 (I-J断面) の第III層以下の層序は第III-4層 (緑灰色 (7.5GY6/1) 層厚 4~14 cm) 粘質土、第IV-2層 (にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 層厚 2~6 cm)、第IV-3層 (浅黄色 (7.5Y7/3) 粘質土 層厚 3~5 cm)、第IV-4層 (にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質土 層厚 3~6 cm)、第V-2層 (暗褐色 (10YR3/3) 粘質土 層厚 4~41 cm)、第V-3層 (黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土 層厚 3~25 cm)、第V-4層 (暗褐色 (10YR3/4) 粘質土 VI-6層のブロックをわずかに含む 層厚 6 cm以上)、第VI-6層 (にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘質土)、第VI-7層 (明黄褐色 (10YR6/8) 砂礫土)、第VI-8層 (黄橙色 (10YR8/8) 岩盤) である。第V-2層は北から南へ厚く堆積し、主に古代以前の遺物を含む。SX2・SK14付近では第III・IV層が削平されており、第II層の直下で第V-2層を検出した。第V-3・4層はSB-2からSX4付近に分布しており、谷か落ち込みの埋土である可能性がある。調査区内で遺物は出土していないが、色調・土質から遺物包含層に含めた。また、V-3層上の遺構検出が困難であったため、上記の遺構はやや掘り下げた状態で検出した。

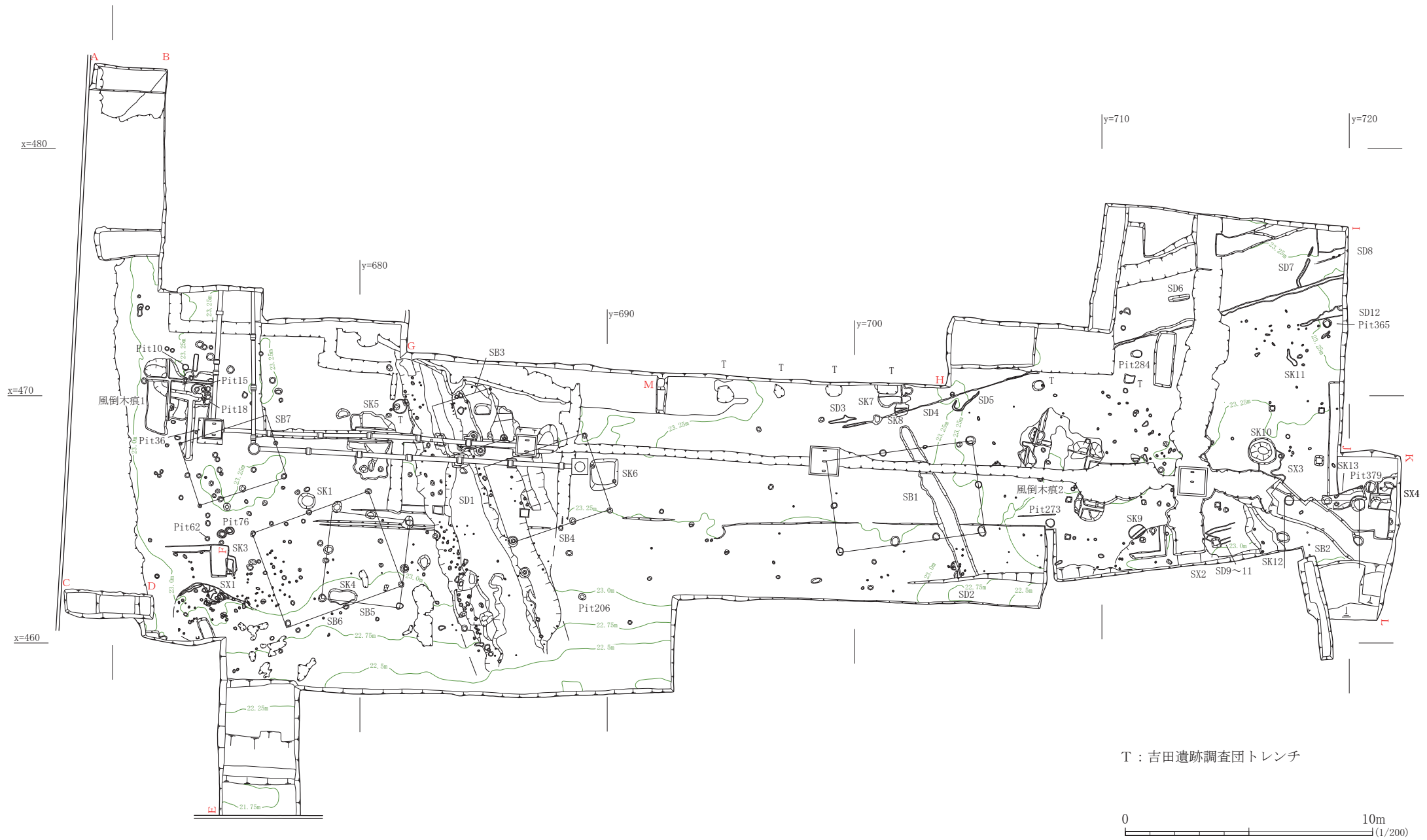


Fig.37 調査区平面図（完掘）

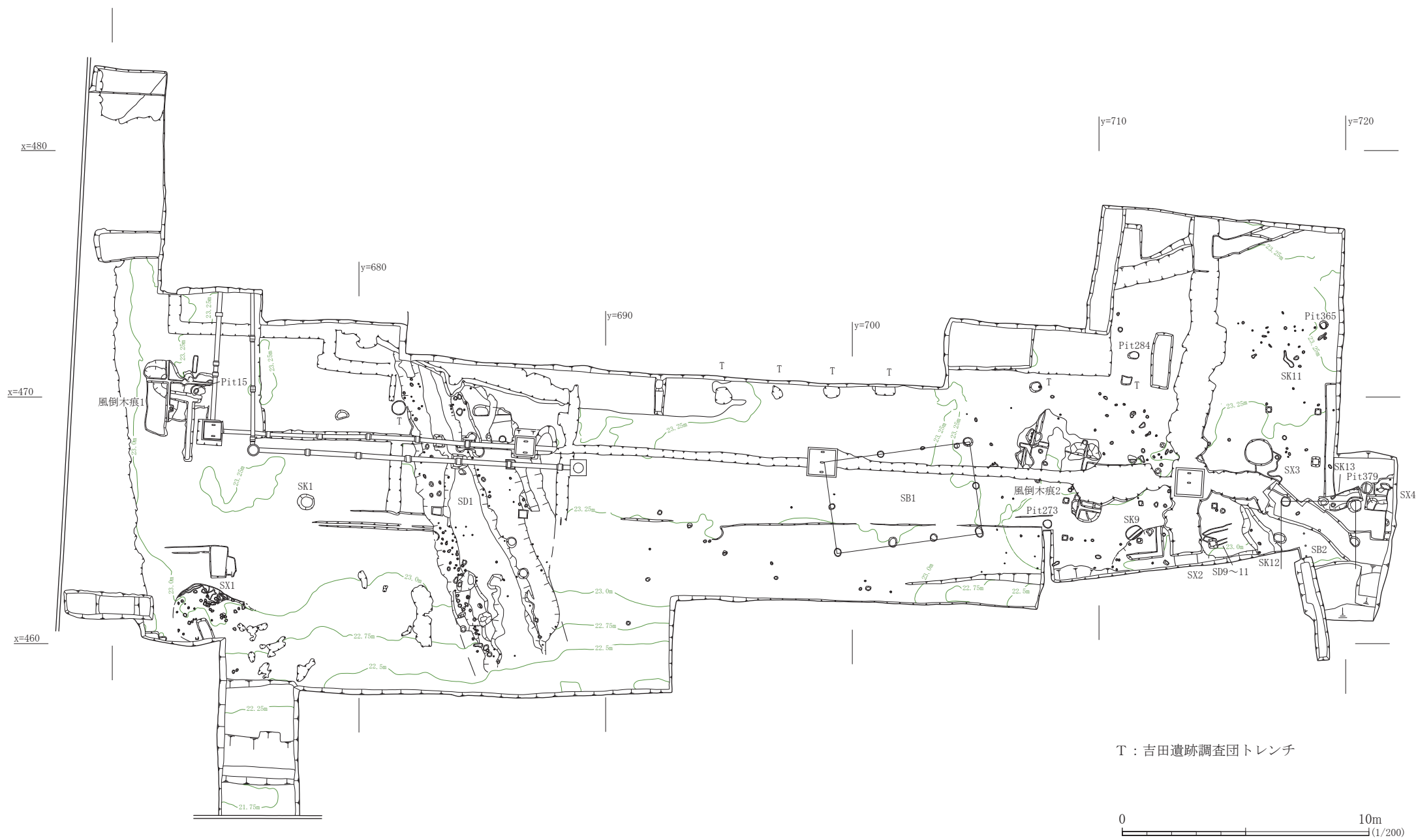


Fig.38 調査区平面図 (古代以前)



Fig.39 調査区平面図（中世以降）

3 遺構

今回の調査では、掘立柱建物跡7棟、溝12条、土坑16基、不明遺構4基、ピット383基³⁾(掘立柱建物跡のもの含む・その他遺構内のものを除く)を検出した。遺物が出土していない遺構もあるが、遺構の時期は埋土の色調から(1)古代以前(埋土色調:黒褐色系)、(2)中世⁴⁾(埋土色調:褐灰色系)、(3)近世以降(埋土色調:緑灰色系)に大別した。なお、Pit206とSB4-Pit208は試掘調査時に検出されたものである。

(1) 古代以前

SB1 (Fig.40, PL.29)

調査区東部に位置する棟方向N82° Eの掘立柱建物跡で、柱穴はPit226・227・229・

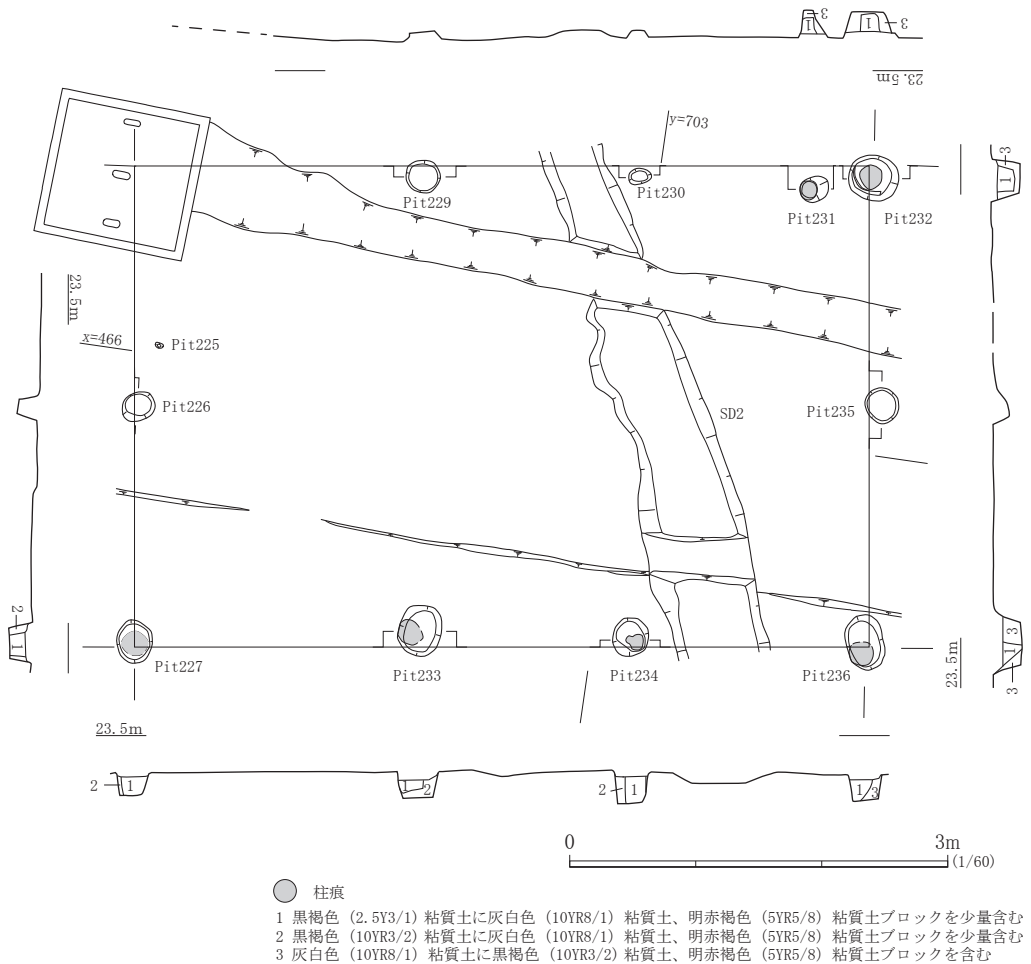


Fig.40 SB1 平面図・断面図

230・232～236 であるが、Pit231 もその可能性がある。SD2・排水升・排水管によって破壊されているが、桁行3間 (5.83 m)、梁行2間 (3.81 m)、床面積約 22.2 m² と考えられる。識別がやや困難であったが、Pit227、231、232、233、234、236 には柱痕が残存していた。Fig. 40 の柱痕の破線は断面によって平面形を補正したことを示す。柱穴の深度は6 (Pit230) ～ 26 cm (Pit234) である。検出時に遺物包含層が残存していなかったことから一定の削平を受けていることが明らかである。Pit227 から須恵器坏底部片 (Fig. 56-1)、Pit232・234 から須恵器坏口縁部片 (Fig. 56-2・3) が出土し、他にピットから土師器細片・剥片が出土した。

SB2 (Fig.41, PL.30)

調査区南東隅に位置する。棟方向 N2° E の掘立柱建物跡で、柱穴は Pit369～373 である。SK15 を切っている。上記柱穴周辺は遺物包含層 (第 V-2 層) が残存していたため、近世以降の水田造成に伴う削平は受けていない。北西-南東方向の攪乱によって破壊されていたが、攪乱の底面で Pit369・373 を検出することができた。なお、Pit371 は土層確

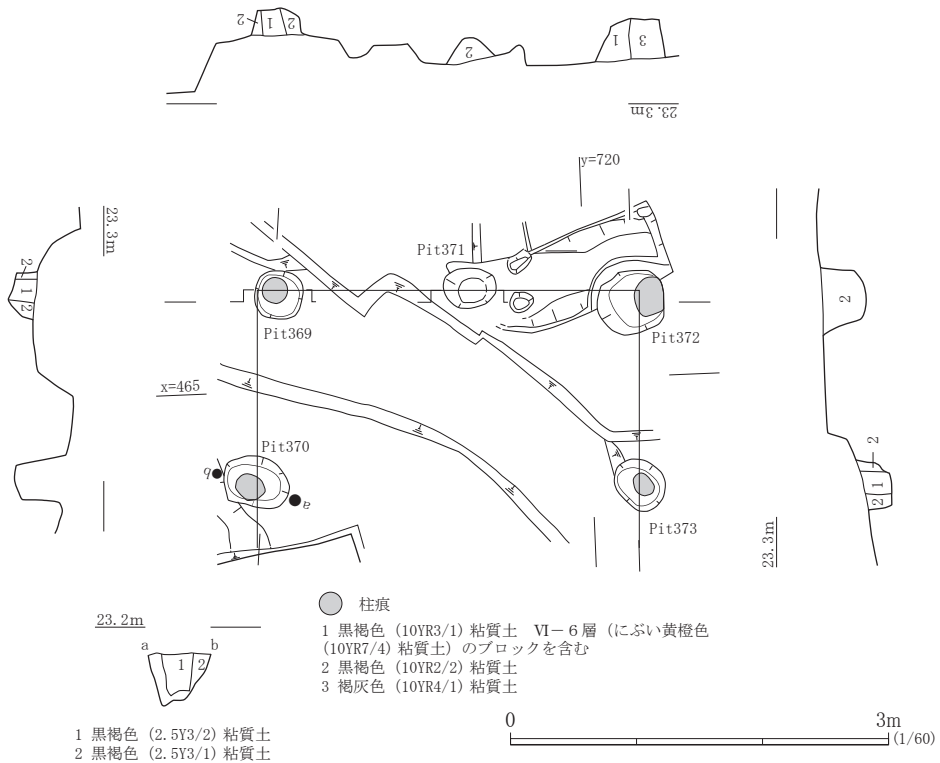


Fig.41 SB2 平面図・断面図

認のためのサブトレンチにより、検出前に一部掘削している。Pit370・373以南は敷地造成時に削平されているが、桁行2間(2.0m)以上、梁行2間(3.81m)と考えられる。Pit369・370・372・373には柱痕が残存していた。柱穴の深度は20cm(Pit371)～81cm(Pit370)である。攪乱による破壊と周辺の標高を考慮すると、本来はPit369の深度が約66cm、Pit373が約52cmであったと推測される。Pit370から須恵器坏口縁部片(Fig. 56-4)、砥石(Fig. 64-257)、Pit371から須恵器坏蓋片(Fig. 56-5)、Pit373から須恵器坏口縁部片(Fig. 56-6)が出土し、他にピットから土師器片、須恵器片、弥生土器片、土器細片、焼土塊、剥片が出土した。

SD1 (Fig.42・43, PL.31～33)

調査区西部に位置する溝である。検出当初はその規模から谷もしくは落ち込みと認識していたが、吉田遺跡調査団の調査区との位置関係を検討し、掘削を進めた結果、同調査団による調査時に検出された「溝状遺構⁵⁾」の延長部であることが判明した。今回調査区内における検出長は13.76m、幅3.17～5.07m、深度0.31～0.62mで、南端部は造成時の削平により失われている。吉田遺跡調査団による調査分を含めた長さは約49.2mである。流路方向はN17°Wで、SB1の梁行方向N8°Wと近似する。

南西部の一部を除いて上面に第V-1層は残存しておらず、大半が水田造成時及び食堂造成時に削平・破壊を受けており、特に東岸で顕著であった。調査時は食堂が営業中で排水管を残す必要があったほか、埋土上面で検出された掘立柱建物跡の配置を検討する必要性等から埋土上面で検出された遺構を残して掘削・記録作業を行うことにした。このため、区画と土層断面の観察を兼ねた畔を設定できる場所が限られたことから、やや変則的ではあるが北から1区、2区、3区、4区を設定し、土層断面の記録と掘削・遺物の取り上げを行った。

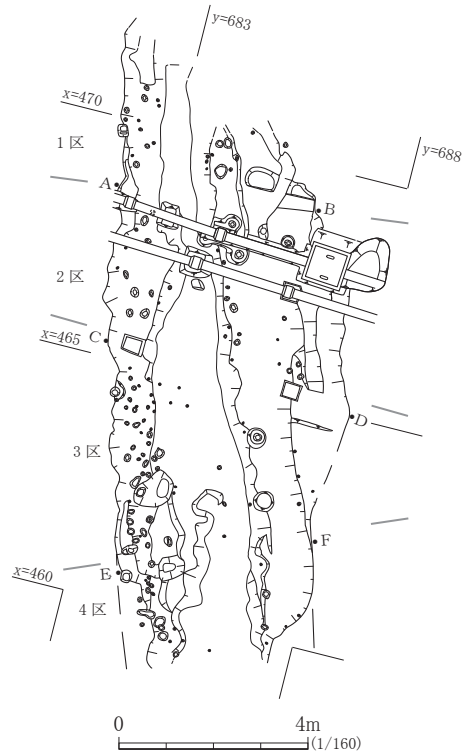


Fig.42 SD1 平面図

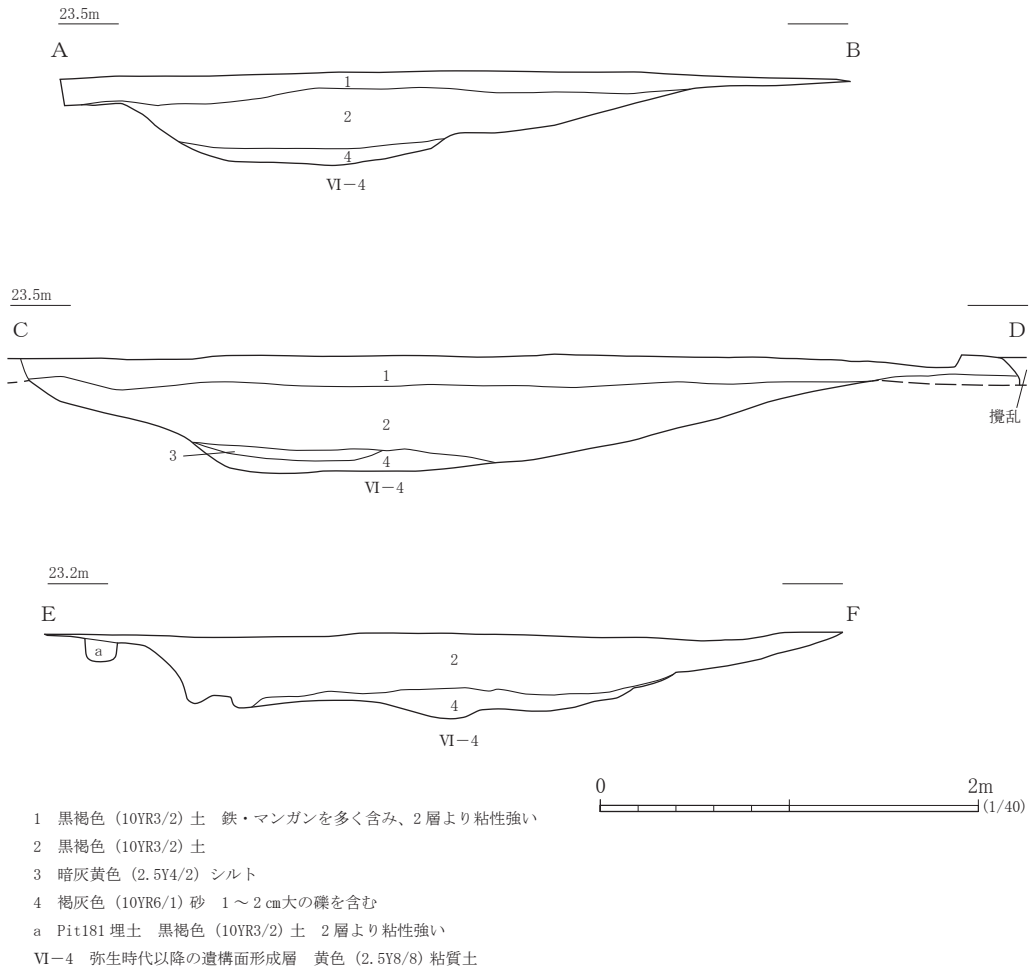


Fig.43 SD1 断面図

断面形を見ると、底面付近は傾斜が急で、部分的に段状を呈するが、上部の傾斜はなだらかである。埋土は第1層：黒褐色 (10YR3/2) 土 (鉄・マンガンを多く含み2層より粘性強い)、第2層：黒褐色 (10YR3/2) 土、第3層：暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土、第4層：褐灰色 (10YR6/1) 砂 (1～2 cm大の礫を含む) に分けられる。第1層と第2層は土色・土質は近似しており、本来同一層とみられるが、第1層は鉄・マンガンを多く含み、乾燥しやすく硬化が顕著であったので、区別した。また、削平のため3区南半～4区では存在しなかった。第1層上面には溝埋没後に中世以降の遺構が掘り込まれていた。近世以降の遺構は遺構埋土の色調が緑灰色系であったため検出は容易であったが、中世の遺構は埋土の色調が第1層と酷似していた。加えて第1層は硬化が顕著であったこともあり、遺構検出

は第1層全体を若干掘り下げて水を散布した後に行った。しかし、上記の事情により第1層に掘り込まれた遺構は全てを検出できなかった可能性が高い。第2層は1～4区、第3層は2・3区の一部に部分的に堆積していた。第4層は砂層で底面では礫を多数含んでおり、1～4区に堆積していた。底面では西側を中心にピットが多数検出された。第I地区E区の「溝状遺構」では、底面から2種類の柱穴群、①「直径20～30cm、深さ20cm内外のもの」、②「溝底にあった柵か垣の跡とみられ4～6cm、深さ8cmばかりの先の尖った穴の跡」が検出され、橋脚や護岸の機能が考えられている⁶⁾。しかし、今回検出したピットには、直径が①、②に相当するものはあるが、配列に規則性がなく、大半が深さ5cm以内であったため、浅い凹みや樹痕等であった可能性がある。また、①に相当するピットには、溝埋没後に掘り込まれたものが含まれていると考えられる。

出土遺物は上層（第1層）、中層（第2・3層）、下層（第4層）に分けて取り上げた。下層～上層から弥生土器、土師器、須恵器、土錘、石鏃、敲石、台石、石庖丁、砥石、石鋏、剥片、釘、鉄斧、鉄滓が出土した。遺物は細片化したものが多い。中層・上層出土遺物には、土師器皿底部（Fig. 57-47）、土師器碗底部（Fig. 58-67・68）、土師器坏もしくは皿（Fig. 58-69）、など10世紀以降の土器が少量含まれる。しかし、上記のようにこれらは埋没後に掘り込まれた遺構に伴う遺物である可能性が高い。これらを除いた遺物は弥生土器と古代の土師器、須恵器である。弥生土器は、第I地区E区の「溝状遺構」でも出土しており、混入した遺物であろう。土器はいずれも弥生時代前期～中期初頭とみられ、弥生時代前期の土器が出土したSX2との関連が考えられる。土師器については時期比定が困難であるが、須恵器については概ね9世紀後半が主体である。須恵器の接合状況を見ると、隣接区を越えて接合するものは少ない。一方で少数だが、下層・中層で接合するものがある。以上からSD1は9世紀代に掘削、埋没したこと、SB1・2と併存した可能性を考えたい。

Pit15 (Fig.37・38, PL.34 (1))

調査区西部に位置する直径約22cm、深さ14cmのピットである。埋土から古墳時代中期の高杯脚部片（Fig. 59-81）が出土した。Pit15から約20m北西には、第I地区E区で検出された古墳時代中期の竪穴住居跡6棟が存在することから、関連する竪穴住居跡もしくは掘立柱建物跡の柱穴であった可能性がある。

Pit273 (Fig.37・38, PL.34 (2))

SB1-Pit236の2.7m東に位置する直径36cm、深さ16cmのピットで、空撮後に検出した。埋土は、にぶい黄橙色（10YR7/4）粘質土に黒褐色（2.5Y3/1）粘質土を含んでいた。長径

26 cm、短径 16 cm の柱痕が遺存していた。埋土から須恵器坏蓋片 (Fig. 59-82)、土器細片が出土しており、古代の掘立柱建物跡の柱穴であった可能性が高い。

Pit284 (Fig.37・38, PL.34 (3))

調査区東部に位置する長径 46 cm、短径 30 cm、深さ 8 cm のピットである。埋土はにぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘質土に黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土を含んでいた。また、直径 16 cm の柱痕が遺存していた。遺物は出土していないが、ピットの規模、埋土から古代に属する可能性が高い。

Pit365 (Fig.44, PL.34 (4))

調査区東部に位置する直径 34 cm、深さ 55 cm のピットである。埋土は黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土に、にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘質土ブロックを少量含んでおり、直径 14 cm の柱痕が遺存していた。土器細片が出土したのみであるが、ピットの規模、埋土の色調から古代に属する可能性が高い。

Pit379 (Fig.48, PL.38 (2))

調査区東部、SB2-Pit372 の北東側に位置する。直径 24 cm、深さ 31 cm のピットで、埋土は黒褐色 (10YR2/2) 粘質土である。弥生土器もしくは土師器片、剥片が出土した。SB2 のピットと規模・埋土が近似する。

その他のピット (Fig.37・38, PL.26)

上記のほか、主に調査区東部で古代以前とみられるピットを検出したが、これらは直径・深さとも 20 cm 未満のものが大半である。遺物の出土もきわめて少ない。

SK1 (Fig.44, PL.34 (5))

調査区西部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸 69 cm、短軸 63 cm で、深さは 49 cm である。埋土は上層が黒褐色 (2.5Y3/1) 土、下層が暗灰黄色 (2.5Y4/2) 土で、いずれも VI-2 層のブロックを含んでいた。両層から弥生土器もしくは土師器とみられる土器細片、炭が少量出土した。埋土の色調から古代以前の遺構と考えられる。

SK11 (Fig.45, PL.26)

調査区東部に位置する。平面形は不整形で、長軸は 75 cm、幅 9～20 cm、深さは 6 cm である。埋土は黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土ににぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘質土ブロックを含んでいた。出土遺物はないが、埋土の色調から古代以前の遺構と考えられる。

SK12 (Fig.45, PL.34 (6))

調査区東部、SB2 の西側に位置する。北端を攪乱で破壊されており、南側は調査区外に

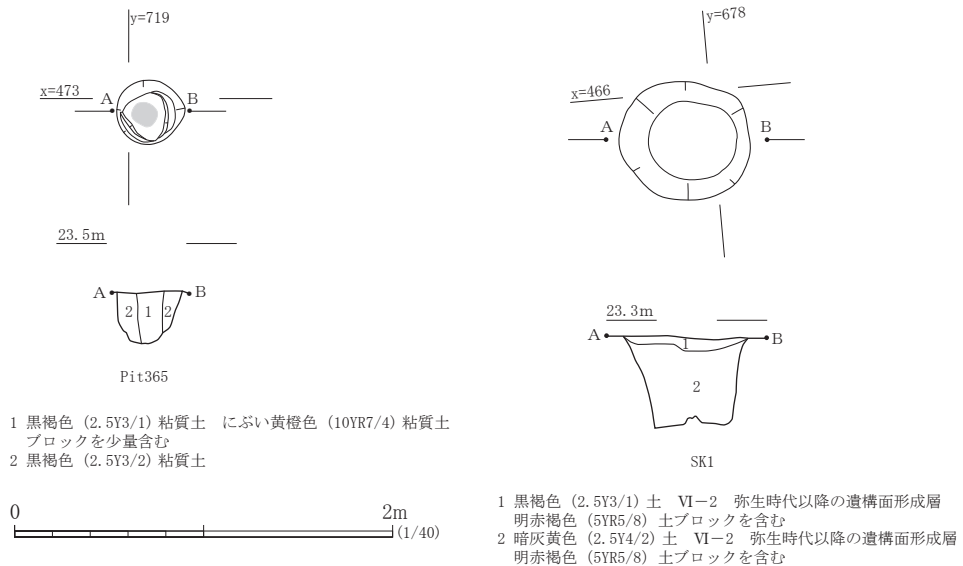


Fig.44 Pit365・SK1 平面図・断面図

広がる。SB2-Pit370に切られる。平面形は溝状で長軸は245cm、短軸は94cm、深さ27cmである。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質土で、弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片、須恵器片が出土した。また、底面でピットを3基検出した。

SK13 (Fig.45, PL.35 (1) (2))

調査区東部、SB2の北東部に位置する。SB2-Pit371、372に切られる。土層確認のためのサブトレンチにより、検出前に一部掘削している。また、埋土が近似しているため、SB2-Pit371との切り合い関係は、一部掘削後に確認した。平面形は長方形とみられ、長さ166cm、幅63cmで深さは8～15cmである。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質土で、弥生土器甕口縁部(Fig.59-83)、土師器片、石錐(Fig.66-291)、砥石、剥片が出土した。土師器片はPit371に伴う可能性が高く、弥生時代前～中期の遺構と推測する。

SX1 (Fig.46, PL.35 (3) (4), PL.36 (1) ~ (3))

調査区西部に位置する。平面形は南半が削平されているため定かではないが、この遺構に伴うとみられる柱穴の分布から、西半は円形で東部に張り出していたと推測する。一部推定を含め、長軸は約320cm、短軸は約240cmである。土層観察アゼ(Fig.34 E-F断面)と重複している。第V-1層検出時に一部を検出し、当初は遺物包含層である可能性を考えたが、第V-1層掘削後に精査した結果、遺構であることが判明した。埋土は黒褐色(10YR3/1)土である。平面形から円形と方形の遺構が切り合っている可能性が高い

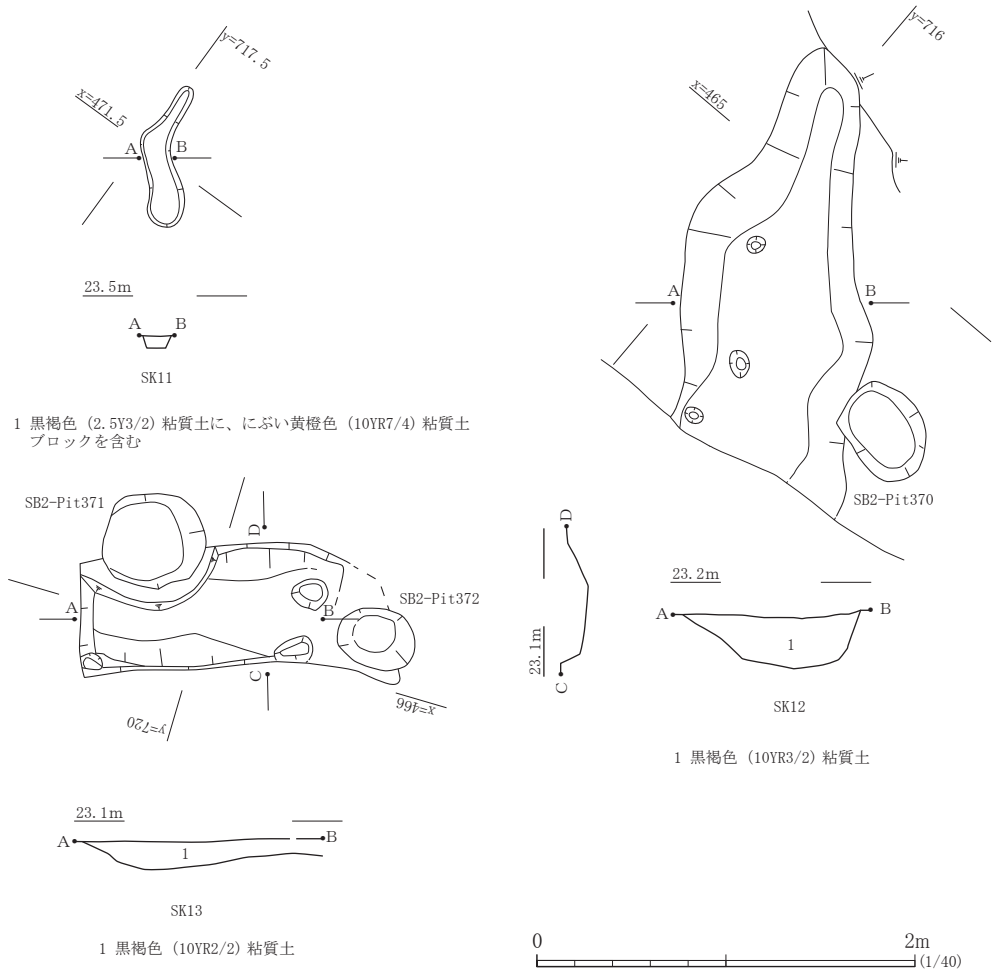


Fig.45 SK11 ~ 13 平面図・断面図

が、埋土で識別できなかった。埋土の掘削を進めたところ、北部から弥生時代前期の土器 (Fig. 59-84 ~ 94, Fig. 60-95 ~ 98) が床面からやや浮いた状態で多数出土した。このほか、埋土からは土師器、須恵器、砥石 (Fig. 66-292)、焼土塊も出土した。土師器、須恵器は上面に堆積した第V-1層に伴う混入であろう。埋土を掘削後、床面上で溝状・土坑状の掘り込み、ピットを検出した。これらのうち、最も深く掘り込まれていたのが、SX1-Pit1・2である。SX1-Pit1は直径34 cm、深さ40 cm、SX1-Pit2は直径30 cm、深さ40 cmである。他は深さ1 ~ 20 cm以内であった。SX1-Pit1からは壺もしくは鉢の底部 (Fig. 60-99) が出土したが、他のピット等からは土器片が若干出土したのみである。前述のように、

遺構

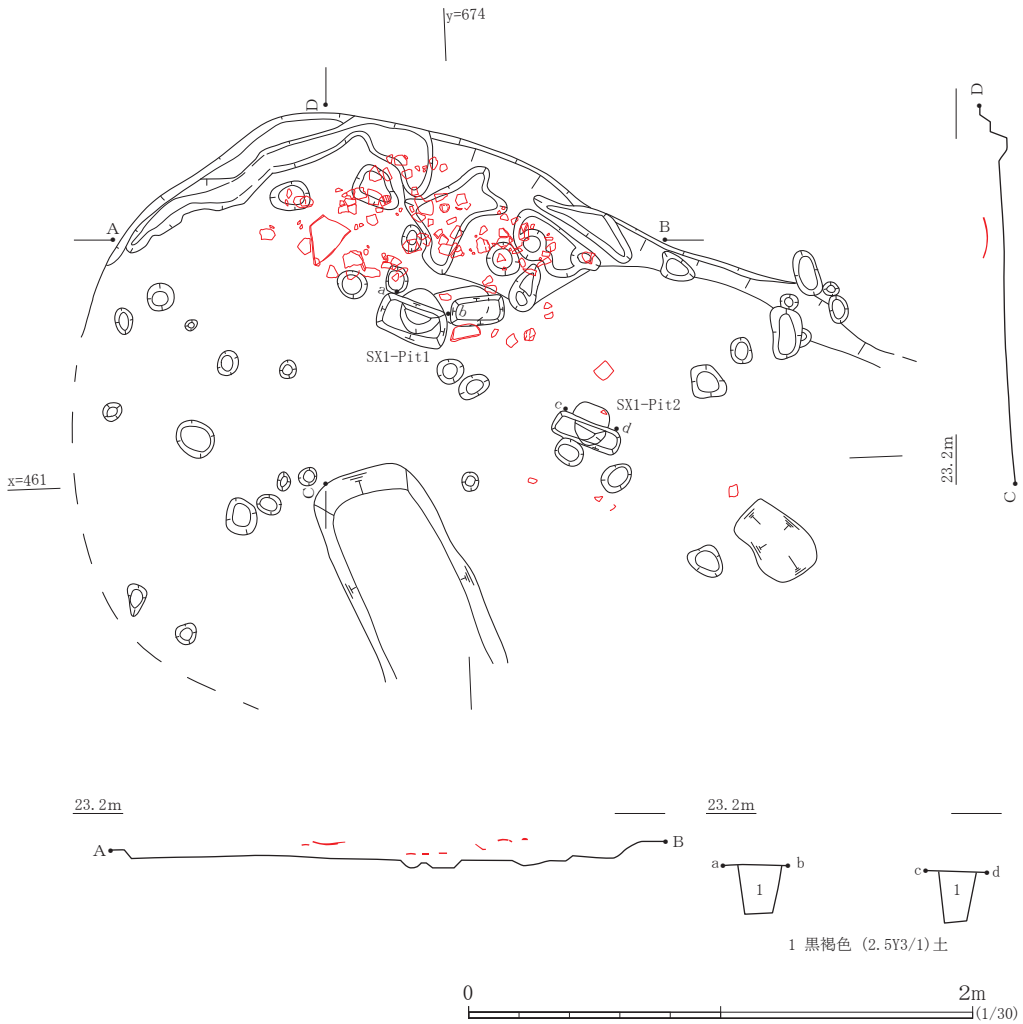


Fig.46 SX1 平面図・断面図

SX1 は円形と方形の遺構が切り合っていたと仮定すると、円形の遺構は竪穴住居跡である可能性も考えられる。しかし、復元直径は2m弱にすぎない。また、検出されたピットは浅いものが多く、配置も不明瞭である。このため、本報告では作業小屋のような機能を持つ簡易的な建物であった可能性を提示することとどめたい。

SK9 (Fig.47, PL.36 (4)・PL.37 (1))

調査区東部に位置する。SX2 に切られる。平面形は楕円形で長軸 69 cm、短軸 49 cm、深さ 4 cm である。埋土は暗褐色 (10YR3/3) 粘質土に黒褐色 (10YR3/2) 粘質土ブロックを多く含んでいた。出土遺物はない。

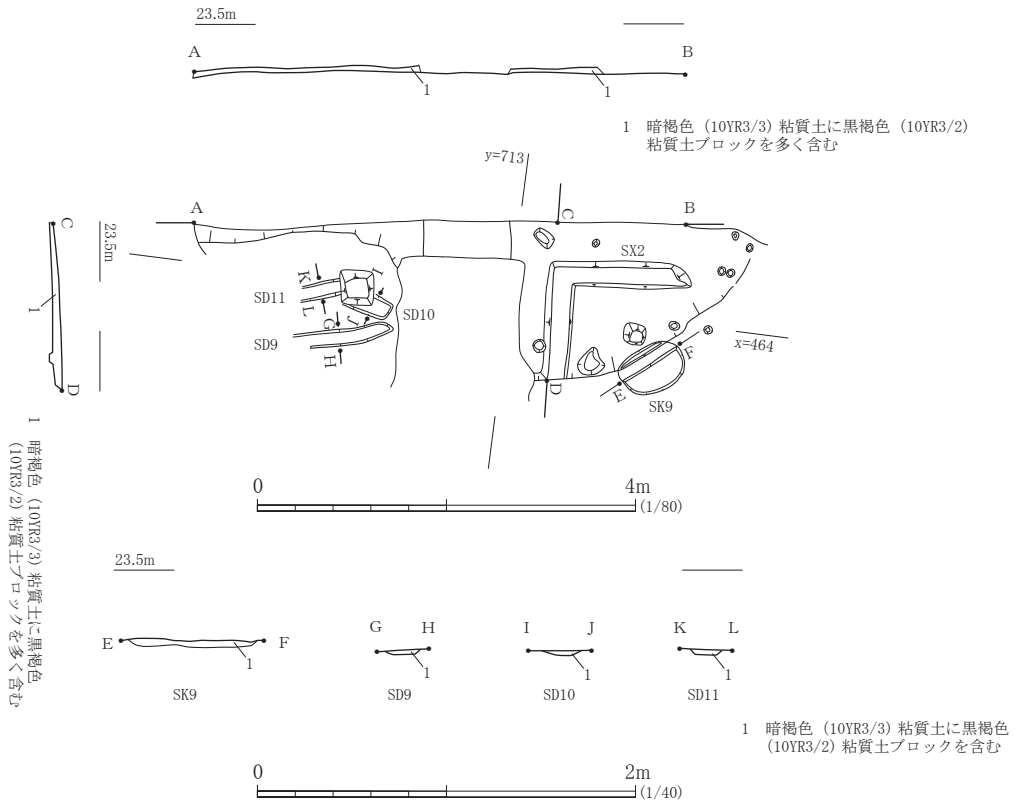


Fig.47 SX2・SD9～11・SK9 平面図・断面図

SX2 (Fig.47, PL.37 (1) (2))

調査区東部に位置する。上面には第V-2層が堆積していた。構内造成時による攪乱、排水管理設により破壊されている。また、SK9を切り、SK12に切られる。このため、全形は不明であるが、平面形は不整形を呈し、長軸は238cm、短軸は178cm、深さは4～10cmで南側へ緩やかに傾斜する。本報告では落ち込みと位置づけておきたい。埋土はSK9と近似するが、SK9よりもやや暗い色調であった。弥生土器もしくは土師器とみられる土器片、須恵器片、石鏃 (Fig. 67-293)、剥片が出土した。

SD9～11 (Fig.47, PL.37 (3) (4))

調査区東部、SX2の北側に位置する。SD10はSD11に切られる。部分的に検出した幅11～14cm、深さ2～3cmの浅い溝である。埋土はいずれも暗褐色 (10YR2/3) 粘質土に黒褐色 (10YR3/2) 粘質土ブロックを含んでいた。SD9から弥生土器もしくは土師器とみられる土器片、SD11から土師器片が出土した。

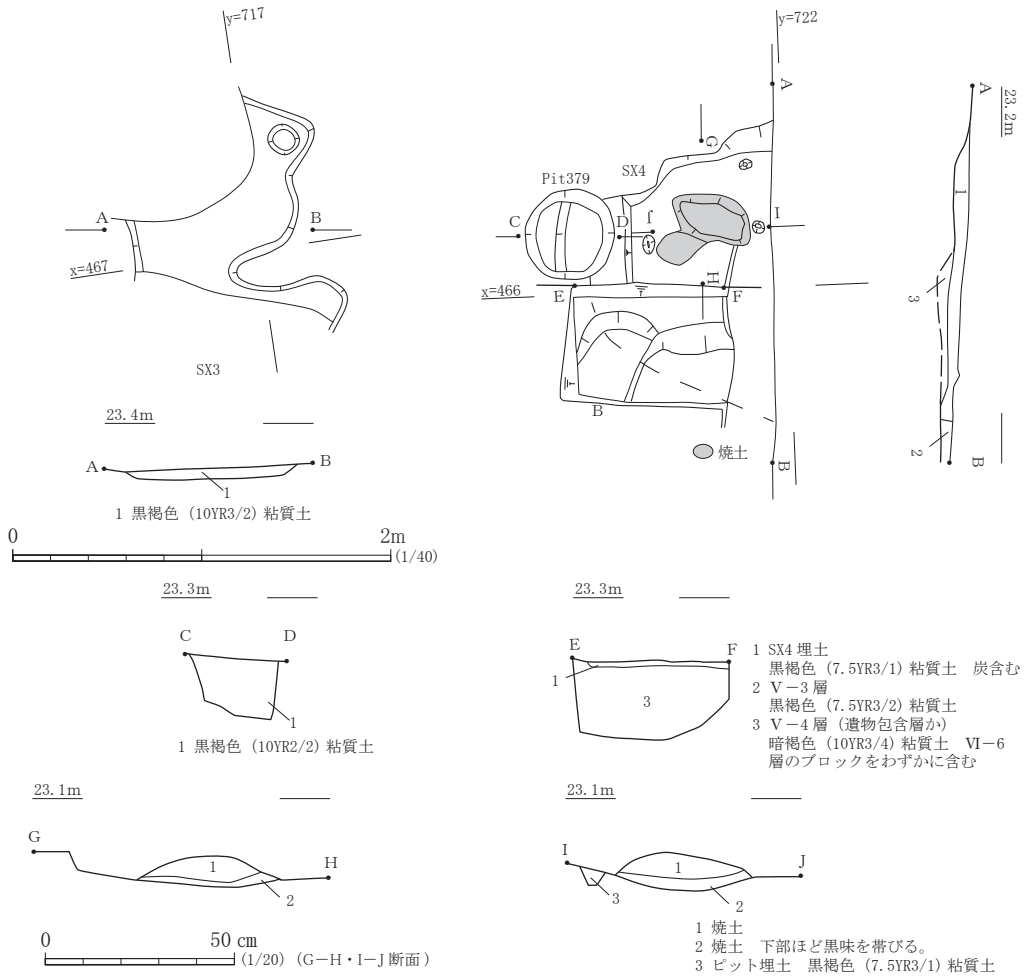


Fig.48 Pit379・SX3・4 平面図・断面図

SX3 (Fig.48, PL.38 (1))

調査区東部に位置する。北側をSK12、南側を排水管理設によって破壊されているため、全形は不明であるが、不整形を呈し、長軸134cm、短軸92cm、深さ6cmである。埋土は黒褐色(10YR3/2)粘質土であった。出土遺物はない。

SX4 (Fig.48, PL.38 (2) ~ (4))

調査区南東部に位置する。Pit379に西側を切られる。また、調査区東側に広がるため全形は不明であるが、平面形は楕円形と推測され、長軸134cm、短軸92cm、深さ6cmである。南半は埋土と近似する第V-3層から掘り込まれており、両者の識別が困難であったため、一部を断ち割って確認したところ (Fig. 48 E-F断面)、床面以下で谷が落ち

込み埋土の可能性がある第V-4層（暗褐色（10YR3/4）粘質土）が検出された。また、北部床面で焼土とピット3基を検出した。焼土は平面形が不整形で、層厚は最大で10 cm、2層に細分され、上部から被熱したとみられる。しかし、埋土からは少量の炭と弥生土器もしくは土師器とみられる土器片が出土したのみで、詳細な時期、性格とも不明である。

風倒木痕 (Fig. 37・38, PL. 24・25)

調査区西部で1箇所（風倒木痕1）、西部で1箇所（風倒木痕2）を検出した。平面形が不明確・不整形で、埋土は第VI層に酷似した粘質土と黒褐色（10YR3/1）粘質土である。縁辺部を中心に縞・斑状にみられる黒褐色シルトが、第VI層に酷似した粘質土の下に潜り込む状況を確認した。時期不明であるが、風倒木痕1・2から土器細片、須恵器片が出土していることから、古代以前に位置づけておきたい。

(2) 中世

SB3 (Fig.49, PL.39 (1) (2))

調査区西部で、SD1 とほぼ重複する。調査区南東隅に位置する。棟方向N72° Eの掘立柱建物跡で、柱穴はPit185・186・190・381である。柱穴の深度は8 cm (Pit190) ~ 24 cm (Pit186) である。Pit186 以外はSD1 上層で検出した。なお、Pit190 は排水管の下で

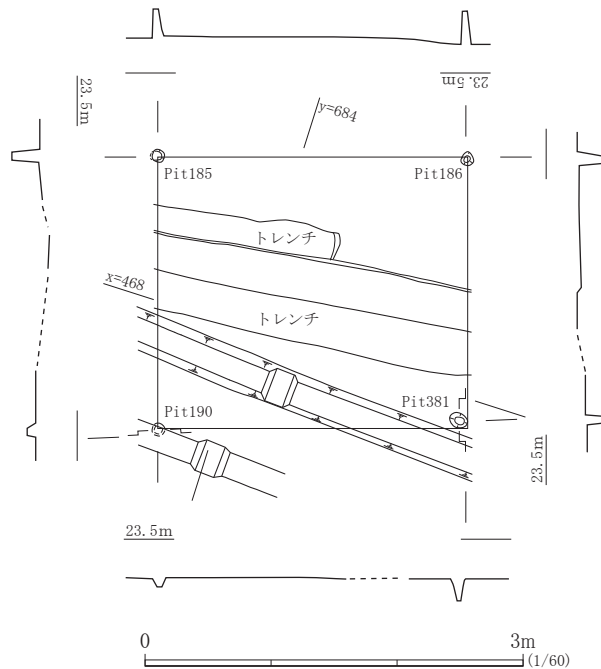


Fig.49 SB3 平面図・断面図

検出した。桁行1間(2.5m)、梁行1間(2.2m)、床面積5.5㎡としたが、周辺の攪乱が著しいため、規模はさらに大きかった可能性がある。遺物はPit381から須恵器片が出土したにすぎないが、SD1埋没後に建てられていること、SB4、SB6・7と棟方向が近似することから、時期は中世と考えられる。

SB4 (Fig.50, PL.39 (3) (4))

調査区東部に位置する。西半分がSD1と重複し、北側の一部が排水管によって破壊されていた。棟方向N71°Eの掘立柱建物跡で、やや歪みがあるが柱穴はPit192・193・196・201・202・204・208(試掘トレンチ柱穴1)で、Pit203もその可能性がある。Pit192・193・196はSD1上層で検出し、埋土の色調はいずれも黒褐色系であった。柱穴のうち、Pit193・203には柱痕を確認した。また、Pit193には柱痕西側に土師器皿が廃棄されている

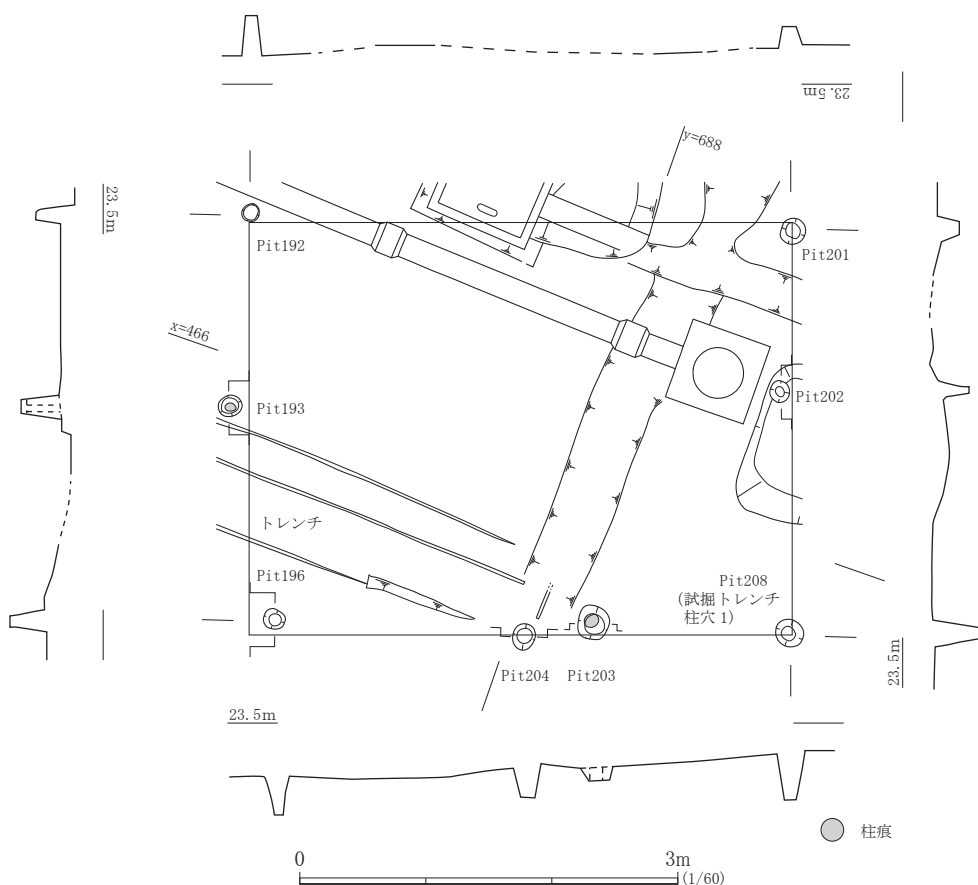


Fig.50 SB4 平面図・断面図

たほか (PL.39 (4))、根石を確認した。柱穴の深度は 14 cm (Pit201) ~ 40 cm (Pit208) である。一部破壊されているが、桁行 2 間 (4.3 m)、梁行 2 間 (3.3 m) と考えられる。Pit192 から須恵器坏底部 (Fig.60-100)、Pit193 から土師器皿 (Fig.60-101) が出土したほか Pit196 から土器細片と板石、Pit201 から土器細片が出土した。

SB5 (Fig.51, PL.41 (2)・PL.42 (1))

調査区西部、SD1 西側に位置する。棟方向 N7° E の掘立柱建物跡で、SB6 と重複するが、前後関係は不明である。やや歪みがあるが柱穴は Pit144・146・153・159・162・164・382 で、Pit145、SB6 と重複する Pit163 もその可能性がある。また、Pit145・146 は第 V-1 層除

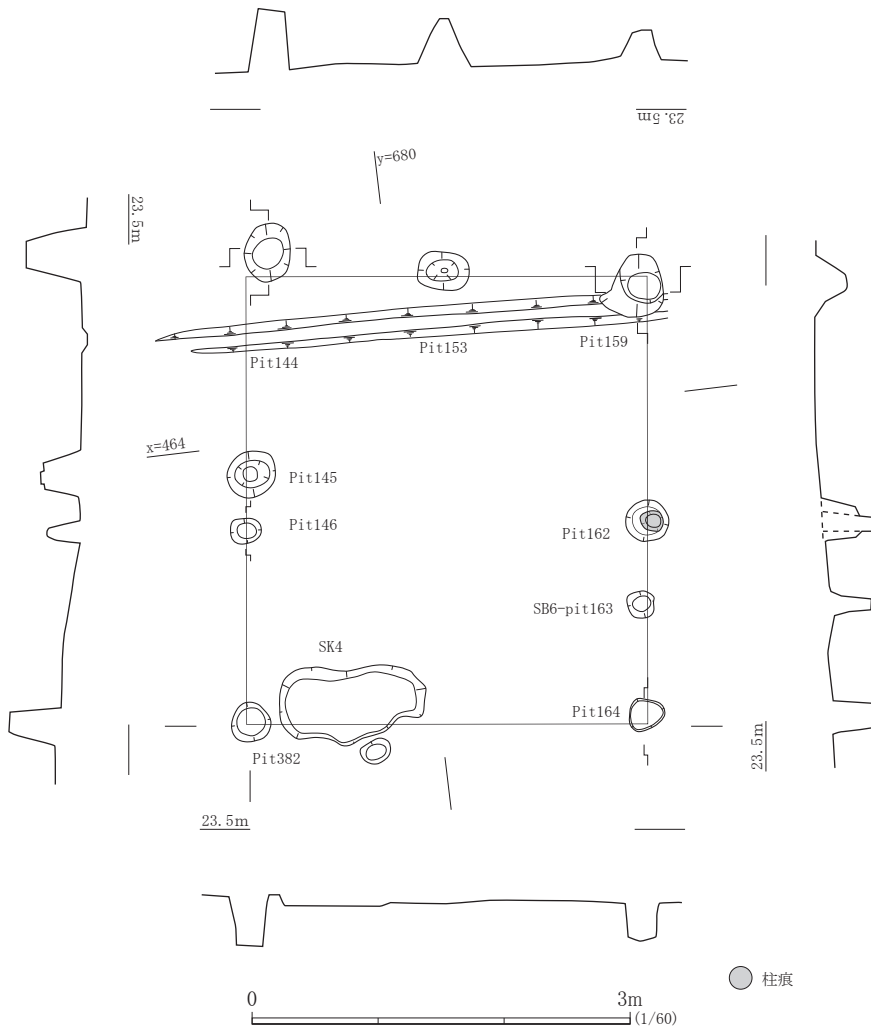


Fig.51 SB5 平面図・断面図

去後に検出した。柱穴の深度は 24 cm (Pit159) ~ 54 cm (Pit144) で、桁行 2 間 (3.6 m)、
梁行 2 間 (3.2 m)、床面積 11.5 m² である。Pit144 から須恵器坏底部、土師器片、青磁片、
Pit145 から土師器片、Pit146 から土師器片、剥片、Pit159 から須恵器坏底部、土師器皿
底部 (Fig. 60-102)、Pit153 から土師器片が出土した。

SB6 (Fig.52, PL.41 (2))

調査区西部に位置する。棟方向 N7° E の掘立柱建物跡で、SB5 と重複する。やや歪みが

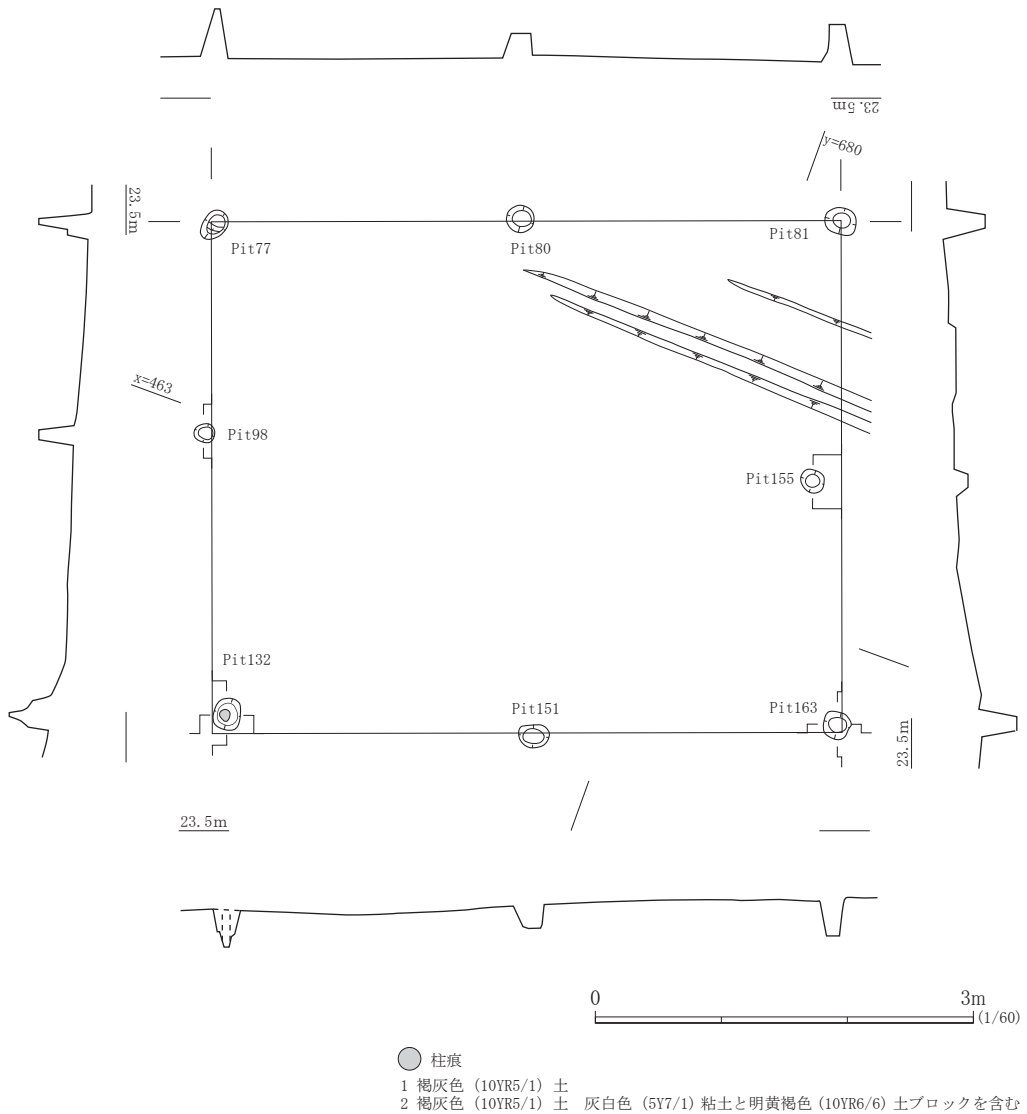


Fig.52 SB6 平面図・断面図

あるが、柱穴はPit77・80・81・98・132・151・155・163で、Pit77・98・155は第V-1層除去後に検出した。Pit132のほか、Pit151・163に直径10～12cmの柱痕が残存していた。柱穴の深度は9cm (Pit155)～42cm (Pit77)で、桁行2間(5.0m)、梁行2間(4.1m)、床面積20.5㎡である。Pit77から土師器片、Pit81から土器細片が出土した。

SB7 (Fig.53, PL.41 (2))

調査区西部に位置する。北～東側の一部が排水管によって破壊されていた。棟方向N72°Eの掘立柱建物跡⁷⁾で、やや歪みがあるが柱穴はPit34・38・41・49・54・55で、Pit35、36・52もその可能性がある。Pit49は第V-1層除去後に検出した。柱穴の深さは9cm (Pit49)～20cm (Pit55)で、桁行2間(3.7m)、梁行2間(2.6m)と考えられる。なお北部が破壊されているため、西面はPit35までが梁行になる可能性もある。Pit54から須恵器片が出土した。

SD2 (Fig.54, PL.29 (1))

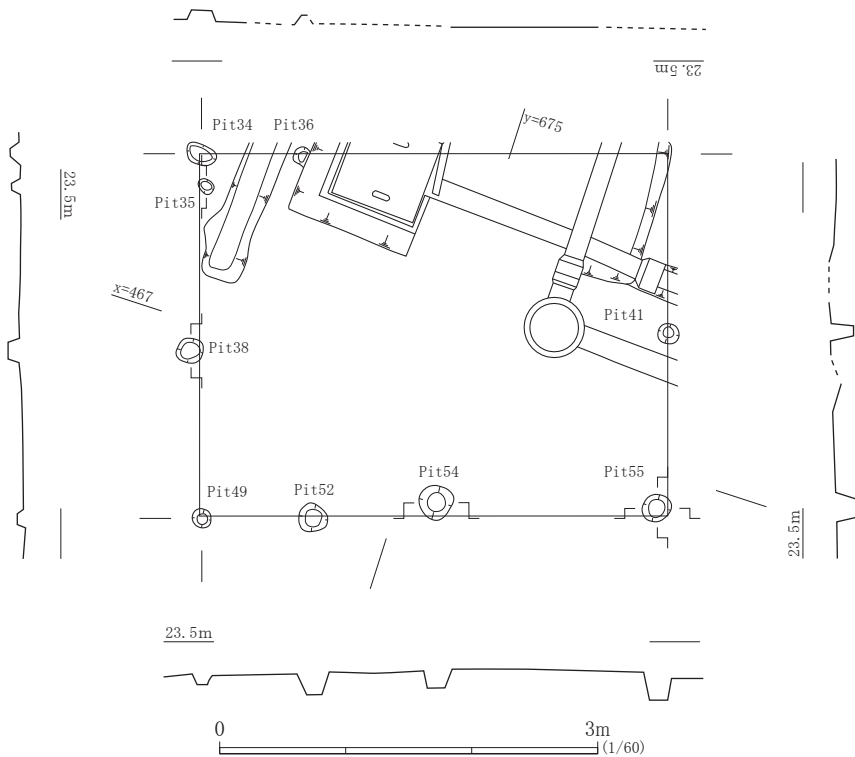


Fig.53 SB7 平面図・断面図

調査区東部に位置する。調査区内における検出長は 6.69 m、幅 0.46 ~ 0.82 m、深さ 3 ~ 6 cm で、南端部は造成時の削平により失われている。埋土は黄褐色 (2.5Y5/4) 土であった。上部の削平が考えられることから、北側に位置する SK7・8 と一連であった可能性がある。流路方向は N25° W で、西側に位置する SB3・4・6・7 の梁行方向と近似する。埋土から土師器片、土師器皿底部片、須恵器片、青磁片、剥片が出土した。

SK7・8 (Fig.54, PL.43 (2))

調査区東部、SD2 の北側に位置する。SK8 は SK7・SD4 に切れ、SK7 は吉田遺跡調査団によるトレンチで破壊されており、北部は調査区外に延びる。SK7・8 の埋土は灰色 (5Y5/1)

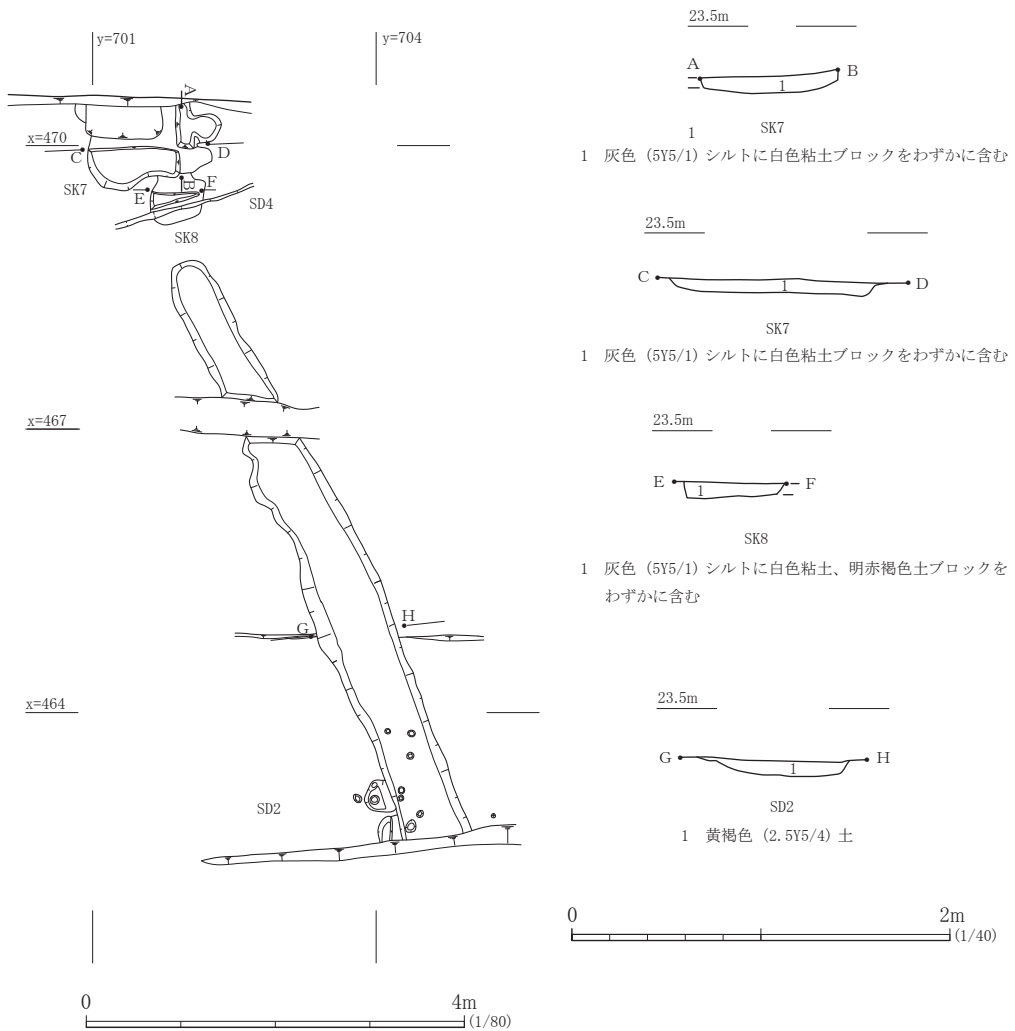


Fig.54 SD2・SK7・8 平面図・断面図

シルトで、SK7は第VI層である白色粘土ブロック、SK8は白色粘土・明赤褐色土ブロックをわずかに含んでいた。SK7はSK8と比較して灰色シルトをやや多く含んでいたが、埋土は近似しており、両者は一連の遺構であった可能性もある。SK7の平面形は不整形で長軸133 cm、短軸75 cm、深さ5～9 cmである。埋土から土師器片、須恵器片、砥石が出土した。SK8は平面形が不整形で長軸60 cm、短軸53 cm、深さ8 cmである。埋土から土師器片が出土した。

Pit18 (Fig.55, PL.43 (3))

調査区西部に位置する。平面形は楕円形で東側を排水管の埋設によって破壊されていた。長軸50 cm、短軸38 cm (推定)、深さ36 cmである。北側が一段低く落ち込んでおり、この部分に柱が存在したとみられる。埋土から、土師器碗片 (Fig. 60-103・104)、土師器皿底部片 (Fig. 60-105)、土師器鍋片 (Fig. 60-106)、板石が出土した。土器は完形に復元できるものはない。これらは柱抜き取り後の祭祀に伴う遺物であろう。

その他のピット (Fig.37・39, PL.40・41)

調査区西部を中心に中世のピットを多数検出した。一部のピットからは土師器片、須恵器片、土師器皿片、瓦質土器片、板石等が出土した。

SK2・3 (Fig.55, PL.43 (1))

調査区西部に位置する。第V-1層上面で検出した。SK2はSK3に切られる。SK2は西端が土層観察アゼと重複し、この部分が乾燥・崩落したため明確な輪郭を把握することができなかったが、平面形は溝状で長軸282 cm (推定)、短軸25～63 cm、深さ5 cmである。埋土は淡黄色 (2.5Y8/4) 土で、弥生土器もしくは土師器片、須恵器片、剥片が出土した。SK3は平面形が不整形で長軸62 cm、短軸30 cm、深さ15 cmである。埋土は緑灰色 (5G6/1) 土に第V-1層を含んでいた。出土遺物はない。

SK4 (Fig.55, PL.41 (2)・PL.42 (1))

調査区西部に位置し、SB5・6と重複するが、前後関係は不明である。平面形は楕円形で長軸118 cm、短軸60 cm (推定)、深さ9 cmである。埋土は褐灰色 (10YR5/1) 土に緑灰色 (5G6/1) 土をやや多く含んでいた。出土遺物はない。

(3) 近世以降

近世以降、統合移転直前まで存在した水田関連の遺構で、SD3～8・12は水田暗渠、SK5・6・10は土坑である。詳細は観察表を参照されたい。このほかに、吉田遺跡調査団によるトレンチ跡を8箇所検出した。トレンチ跡の埋土は第III～V層・遺構埋土を含んでおり、近世

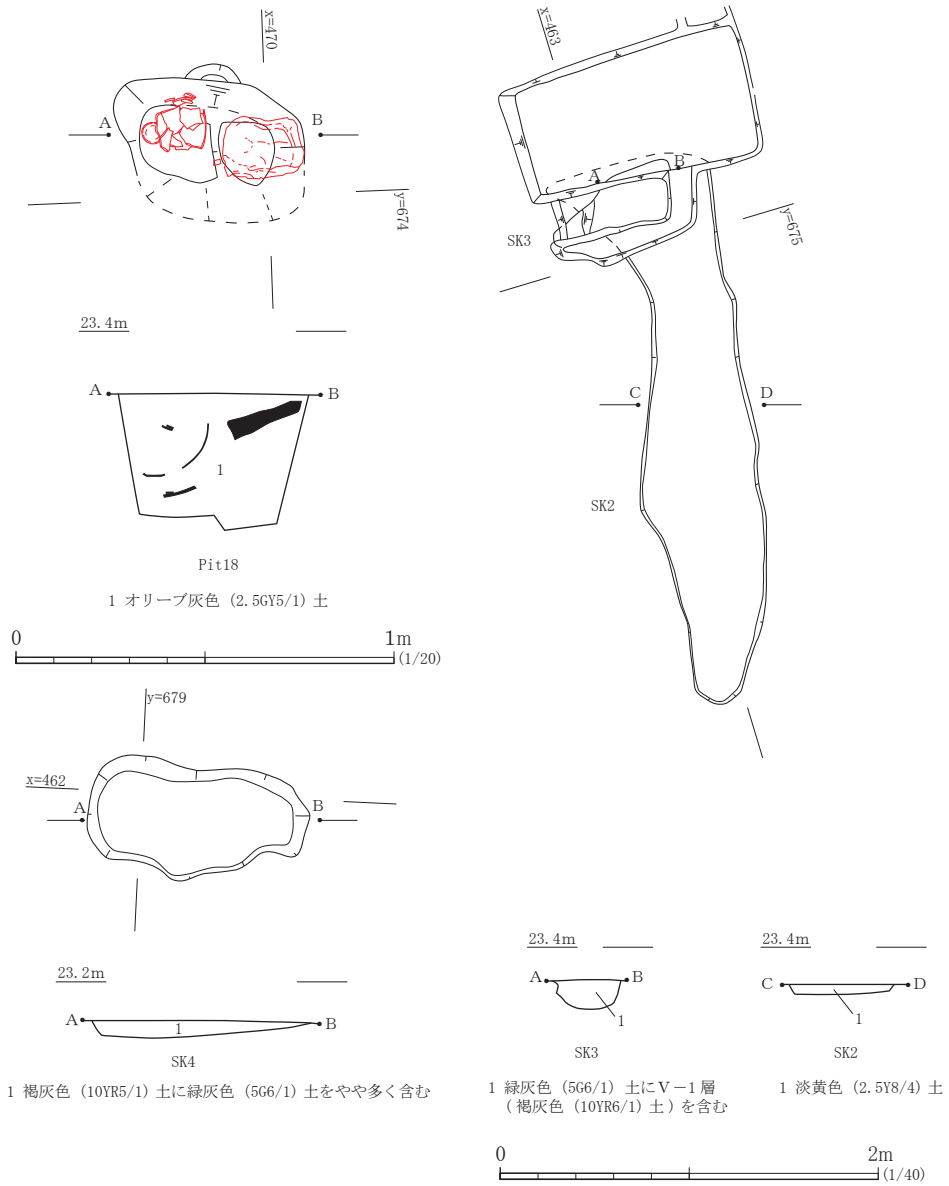


Fig.55 Pit18・SK2～4 平面図・断面図

以降の遺構との識別が困難であった。このため、同調査団の図面に掲載されていないが、平面形・規模がトレンチ跡と近似するSK6・10も同調査団のトレンチ跡である可能性がある。

4 遺物

(1) 土器

SB1 出土土器 (Fig.56-1 ~ 3, PL.44)

1 は Pit227 出土の須恵器無高台坏の底部。摩滅するが底面に回転ヘラ切り痕を残す。2 は Pit232、3 は Pit234 出土の須恵器坏口縁部。

SB2 出土土器 (Fig.56-4 ~ 6, PL.44)

4 は Pit373 出土の土師器坏口縁部。5 は Pit371 出土の須恵器坏蓋口縁部。口縁部は屈曲し、端部が下垂する。6 は Pit370 出土の須恵器杯口縁部。

SD1 下層出土土器 (Fig.56-7 ~ 33・Fig.57-34 ~ 37, PL.44・45・48)

7 は弥生時代前期の壺胴部。タマキガイ科の貝殻腹縁で無軸羽状文と直線文2条を施文する。8 ~ 10 は弥生土器甕底部。いずれも風化が激しい。形態と砂粒を多く含む胎土の特徴から前期~中期初頭と考えられる。

11・12 は須恵器坏蓋つまみ部。いずれも扁平なボタン状で中央部がやや凹む。13 ~ 23・26 ~ 30 は須恵器高台付坏底部。底部-胴部の境界かそれよりやや内側に低い高台を付ける。「溝状遺構」出土遺物の報告で指摘されているように、高台の形態は大別すると、①高台内端が下方に突出し、接地面となるもの (Fig. 56 - 13 ~ 21・26 ~ 29)、②高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地するもの (Fig. 56 - 22・23・30) がある。14 は完形復元可能な坏で、底面から胴部が直線的に立ち上がる。24・25・31 は須恵器無高台坏底部。32・33 は須恵器坏口縁部。34 ~ 36 は須恵器壺胴~底部。34 は底部-胴部の境界に外方へ張る高い高台を付け、底面にヘラ切り痕を残す。35 は平底で胴部が直線的に張り出す。36 は断面方形の高台を付ける。37 は須恵器甕口縁部。口唇部を拡大して面取りをしている。

SD1 中・下層出土土器 (Fig.57-38 ~ 41, PL.48)

38 ~ 41 は須恵器高台付坏で。38・41 は胴~底部。38 は高台内端が下方に突出し、接地面となるもので、39 ~ 41 は高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地する。39・40 は口縁部~底部が残存し、完形復元可能。39 は口径にやや歪みがあり、内外面に回転ナデによる凹みを顕著に残す。底部-胴部の境界に外方に張り出す高台を付ける。内底面には重ね焼きの際に付着した別個体の坏高台部が残る。40 は口縁部がわずかに残存するのみで歪みがある。底部-胴部の境界よりやや内側に高台を付け、底面から胴部が直線的に立ち上がる。

遺物

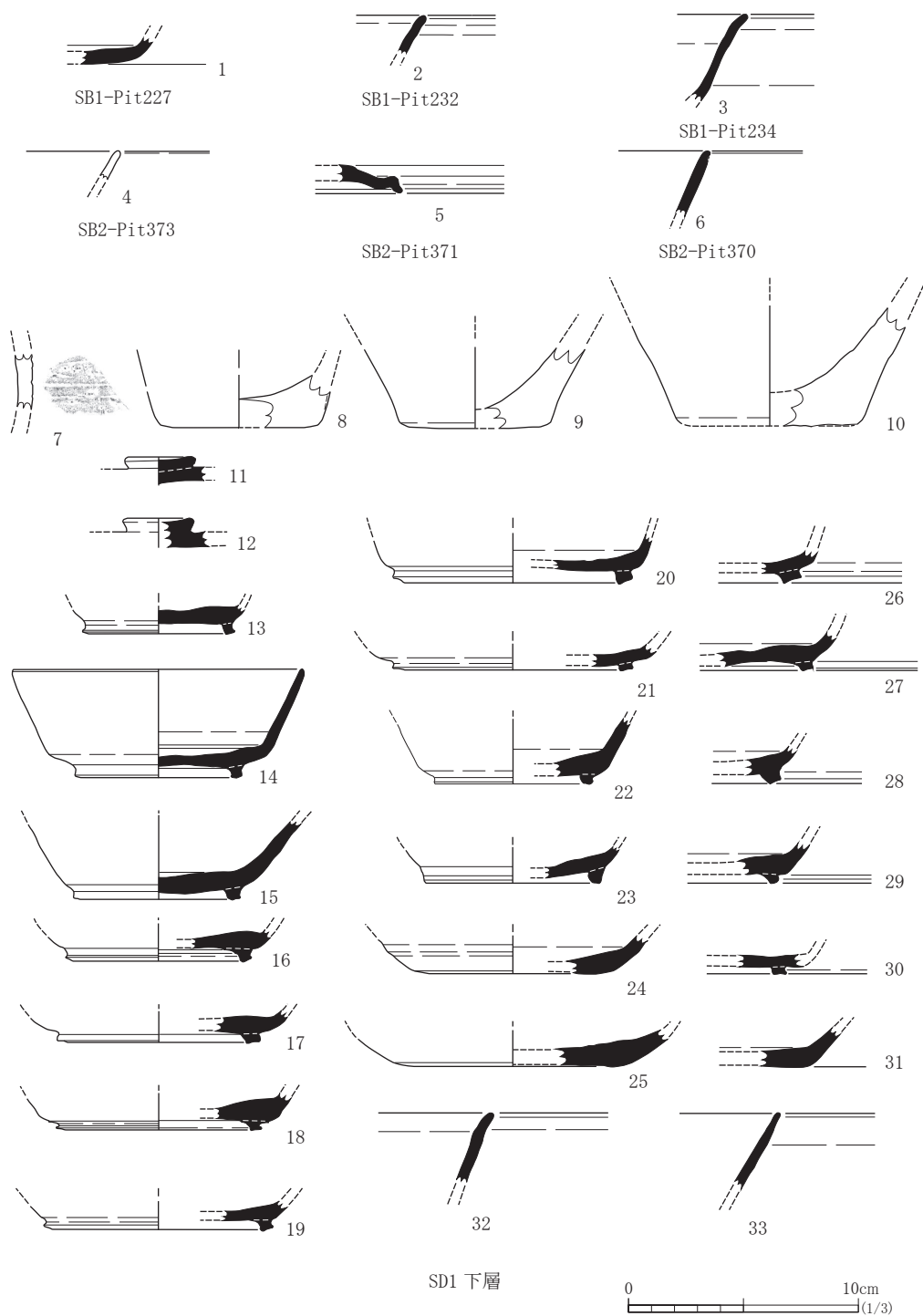


Fig.56 出土遺物実測図①(土器)

SD1 中層出土土器・土製品 (Fig.57-42 ~ 60・Fig.58-61 ~ 64, PL.45 ~ 48)

42は弥生土器甕底部。43は土師器高台付坏。44～46は土師器坏底部。47は土師器皿底部で底面に糸切痕が残る。前項で述べたように本来は溝埋土上面から掘り込まれた中世のピット埋土に含まれていた可能性が高い。48・49は土師器甕で両者は同一個体の可能性がある。48は口縁部で内外面にヨコナデを施す。49は胴部で摩滅が激しいが外面の一部に斜方向のナデが観察できる。

50は須恵器坏蓋つまみ部。51～56は須恵器高台付坏。51～54は高台内端が下方に突出し、接地面となるもので、55・56は高台が内端・外端とも接地する。56は外底面にヘラ記号の一部が残る。57・58は須恵器無高台坏底部。59・60は須恵器坏口縁部。60・61は須恵器壺。61は胴部中位が屈曲する長頸壺の胴部。62は平底の底部。63は須恵器甕口縁部。口唇部を拡張して面を取る。

64は土錘。胎土は0.5～2.5mmの砂粒を少量含むが比較的精良である。最大長6.2cm、最大幅2.15cm、孔径0.6cm、重量は21.59gである。土錘は「溝状遺構」でも2点出土しており⁹⁾、64が3点目となるが、本例が最大である。

SD1 上層出土土器 (Fig.58-65 ~ 80, PL.47・49)

65は弥生土器壺もしくは鉢の底部。内外面とも摩滅が激しいが、内面の一部でミガキが観察できる。接合痕で剥離する。66は弥生土器甕底部。上底を呈する。内外面とも摩滅が激しい。65・66とも砂粒を多く含むこと、器形から前期～中期初頭とみられる。

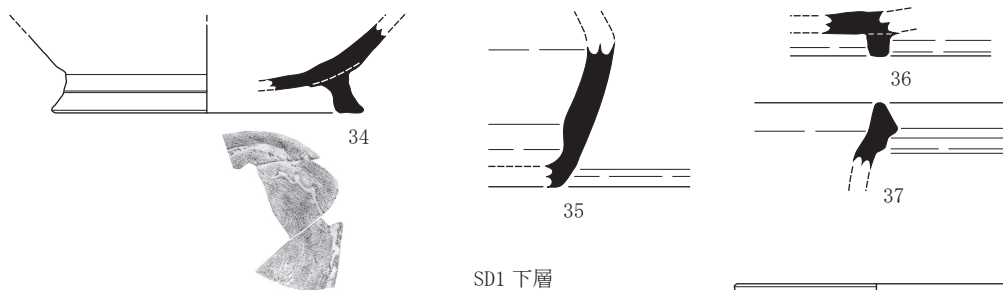
67は土師器坏。高台端部を欠損する。68は土師器碗。内外面にミガキを施す。69は土師器坏か。底面に糸切り痕を残す。70は土師器碗口縁部。口縁部先端をわずかに外反させる。71は土師器甕。口縁部内外面にヨコナデを施す。胴部の調整は摩滅で不明。

72～74は須恵器坏蓋。72はつまみ部が扁平なボタン状で中央部がやや凹む。外面全体に自然釉が掛かる。73～76は低い天井部から口縁部が屈曲し、端部が下垂する。77・78は須恵器高台付坏底部。いずれも高台内端が下方に突出し、接地面となる。79は須恵器皿。底面には回転ヘラ切り痕があり、底部－胴部の境界に低い高台を付ける。胴部は緩やかに外湾する。口縁部内面にはわずかに凹む強いナデを施しており、緑釉陶器もしくは灰釉陶器の段皿を模倣した可能性¹⁰⁾がある。80は須恵器甕頸部か。2条の沈線を挟んだ上下に櫛描波状文を施す。下段の波状文は8条単位である。

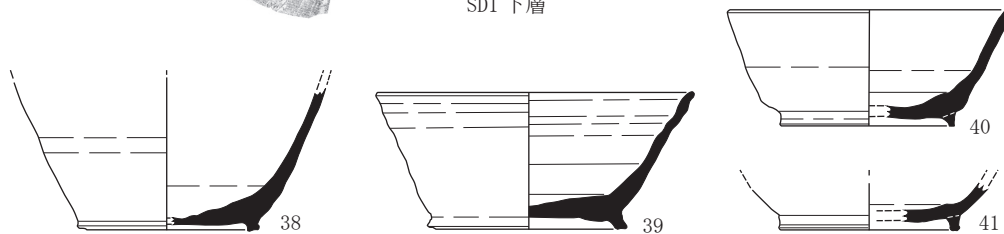
Pit15 出土土器 (Fig.59-81, PL.47)

81は土師器高杯脚部。裾部は屈曲しやや肥厚させている。裾部より上の内面はヘラ削

遺物



SD1 下層



SD1 中・下層

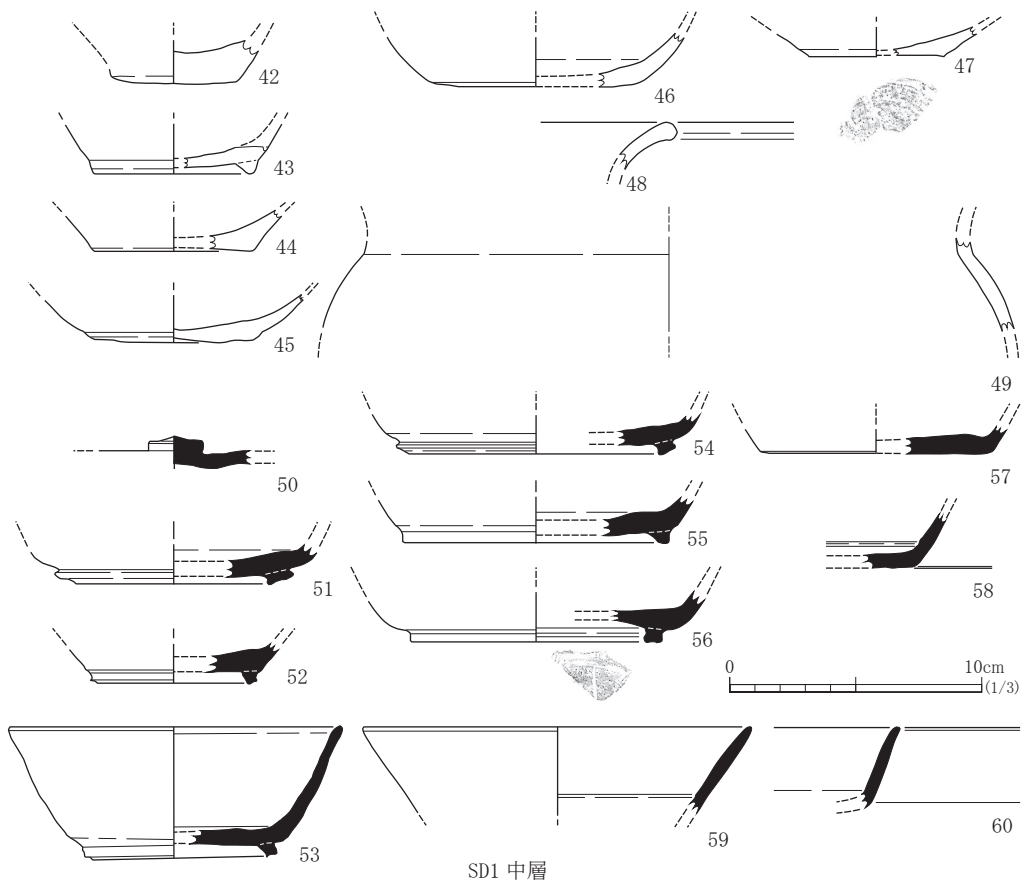


Fig.57 出土遺物実測図②(土器)

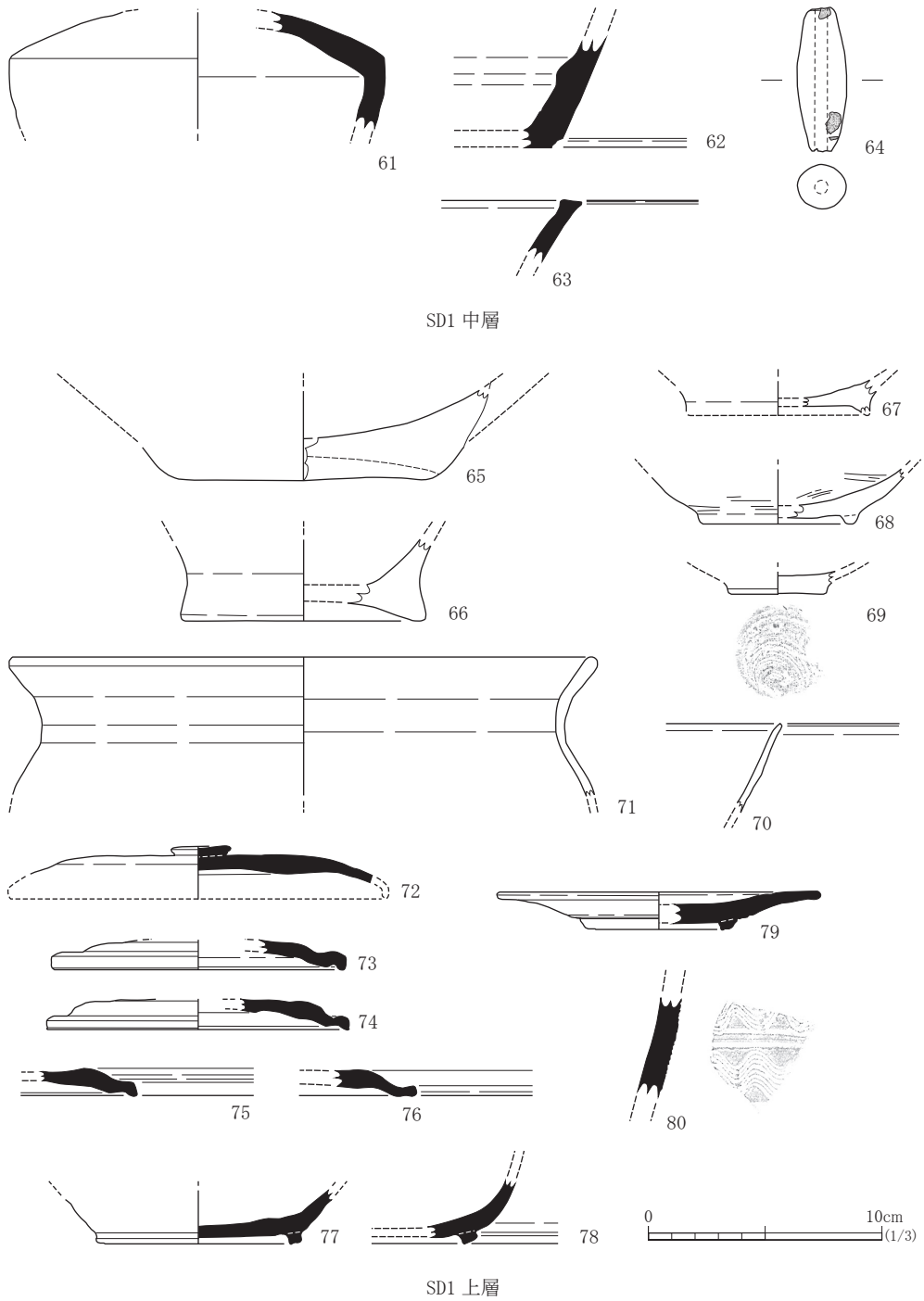


Fig.58 出土遺物実測図③(土器・土製品)

りの後、ミガキを施す。他の箇所はミガキを施す。形態的特徴から古墳時代中期と考えられる。

Pit273 出土土器 (Fig.59-82, PL.47)

82 は須恵器坏蓋口縁部。天井部から内湾して口縁部が下垂する。

SK13 出土土器 (Fig.59-83, PL.47)

83 は弥生土器甕口縁部。摩滅が激しく、端部の刻目の有無は不明。前～中期と考えられる。

SX1 出土土器 (Fig.59-84-94・Fig.60-95～99, PL.49・50)

SX1 からは弥生時代前期の土器がまとまって出土した。84～87 は壺口縁部。85 は頸部に2条の沈線を施し、最下段に沈線もしくは段の一部が残存する。86 は口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。頸部に段があり、その上に2条の沈線を施す。口縁部内面には、2条単位の文様の一部が残存する。88 は壺頸～胴部。段があり、その直下に3条以上の沈線を施す。89 は壺胴部。89 は低い断面台形状の削出突帯上に2条の沈線を施す。90 は壺頸～胴部。浅い段があるが、全体的に摩滅が激しく文様の有無は不明。91・92 は同一個体とみられる壺胴部。91 の頸胴部界の区分文様は1条の沈線を施す削出突帯の下部である。その下にはへら描斜軸木葉文の一部が残る。92 はへら描斜軸木葉文の下部である。93・94 は壺胴部。93 は無軸羽状文を施し、下端に区分文様の沈線が1条残る。摩滅が激しいため施文具は不明。94 は無軸羽状文の下に区分文様の沈線3条を施す。取り上げ時に表面が剥離したため調整は不明であるが、文様は全てタマキガイ科の貝殻腹縁が使用されている。95～97 は同一個体とみられる甕。95 は口縁部。風化が激しく端部の刻目の有無は不明。96 は胴部。断面図は接合しない3点のうち、左端の破片を図化した。4条の沈線を施し、上から1～2条間、2～3条間に刺突文を施す。97 は底部。やや厚底を呈する。風化が激しいが、外面の一部でタテハケが残る。95・96 は口径・胴径とも復元しえないが、97 から大型であることがうかがえる。98 は蓋口縁部。1箇所を紐孔とみられる上半部の穿孔痕がある。99 は Pit1 出土の壺もしくは鉢底部。摩滅・剥離が著しく、外底面が残存するにすぎない。

SB4 出土土器 (Fig.60-100・101, PL.51)

100 は Pit192 出土の須恵器坏底部。底部～胴部の境界よりやや内側に低い高台を付ける。Pit192 は SD1 埋土を掘り込んでいることから、本来は SD1 埋土に含まれていたと考えられる。101 は Pit193 出土の土師器皿。ほぼ完形で底面には糸切痕が残る。内面の一部に

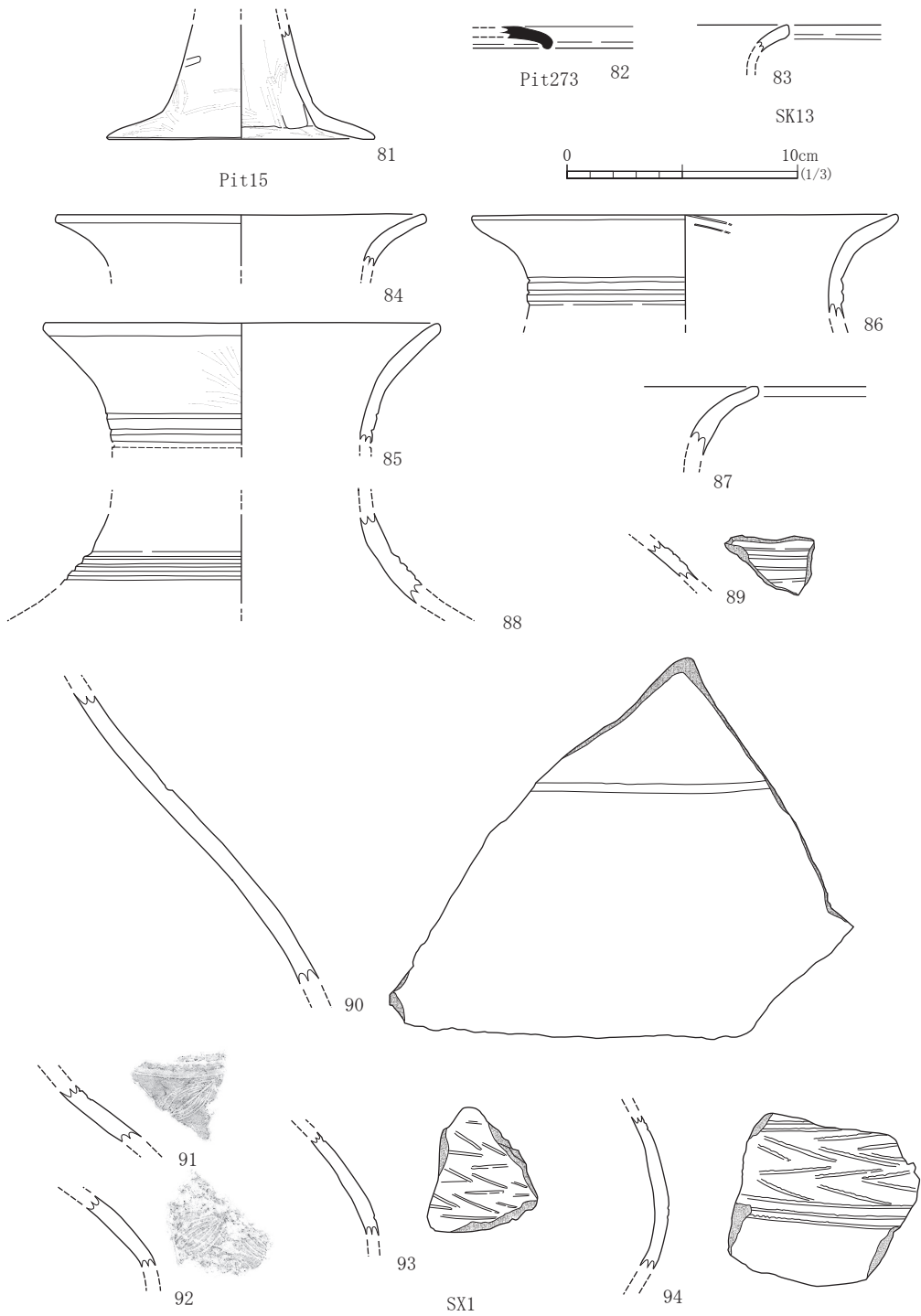


Fig.59 出土遺物実測図④(土器)

はススが付着する。

SB5 出土土器 (Fig.60-102, PL.51)

102 は Pit159 出土の土師器皿底部で、底面に糸切痕を残す。

Pit18 出土土器 (Fig.60-103 ~ 106, PL.51)

103・104 は土師器壺。いずれも高台の一部を除き、底部の大半を欠損する。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、内外面に回転ナデによる凹みが残る。外面・内面上半にヨコミガキ、内面下半にタテミガキを施す。104 は口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。風化が激しいが、内外面の一部にヨコミガキが残る。105 は土師器皿底部。風化が激しいが底面に糸切痕を残す。106 は土師器鍋。口縁部をL字状に強く折り曲げ、その際の指頭痕が残る。胴部外面にはスス・内面にはコゲが付着する。

Pit36 出土土器 (Fig.60-107, PL.51)

107 は土師器皿口縁部～胴部。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。回転ナデの後、内外面にヨコミガキを施す。

Pit62 出土土器 (Fig.60-108, PL.51)

108 土師器壺もしくは土師器皿の底部。底部が外方へ張り出す。摩滅により調整は不明。

Pit10 出土土器 (Fig.60-109, PL.51)

109 は土師器壺口縁部～胴部。摩滅するが、内外面に回転ナデによる凹みが顕著に残る。

Pit76 出土土器 (Fig.60-110, PL.51)

110 は萩焼開口碗の底部。外面は露胎で、内面に灰釉を施釉する。18世紀後半～19世紀初頭。

西部第Ⅴ－1層出土土器 (Fig.61-111 ~ 120, PL.51・52)

111・112 は土師器壺底部。いずれも底部－胴部の境界に低い断面三角形の高台を付ける。

113 は土師器壺口縁部。内外面にミガキを施す。

114 は須恵器坏蓋つまみ部で、やや突出したにぶい宝珠形を呈する。115 は須恵器高台付坏底部。高台内端が下方に突出し、接地面となるタイプだが、端部先端は欠損する。

116～119 は龍泉窯系青磁碗で、116、117 が口縁部。118・119 が胴部。118 は鎬蓮弁文、119 は蓮華文を施す。118 が13世紀中頃。その他は12世紀後半～13世紀前半。120 は白磁碗¹¹⁾Ⅶ類の底部。見込みに蛇の目釉剥ぎがある。12世紀後半。

東部第Ⅴ－2層下部出土土器 (Fig.61-121 ~ 134, PL.52・53)

121 は土師器坏。摩滅が激しく調整は不明。須恵器の焼成不良品である可能性もある。

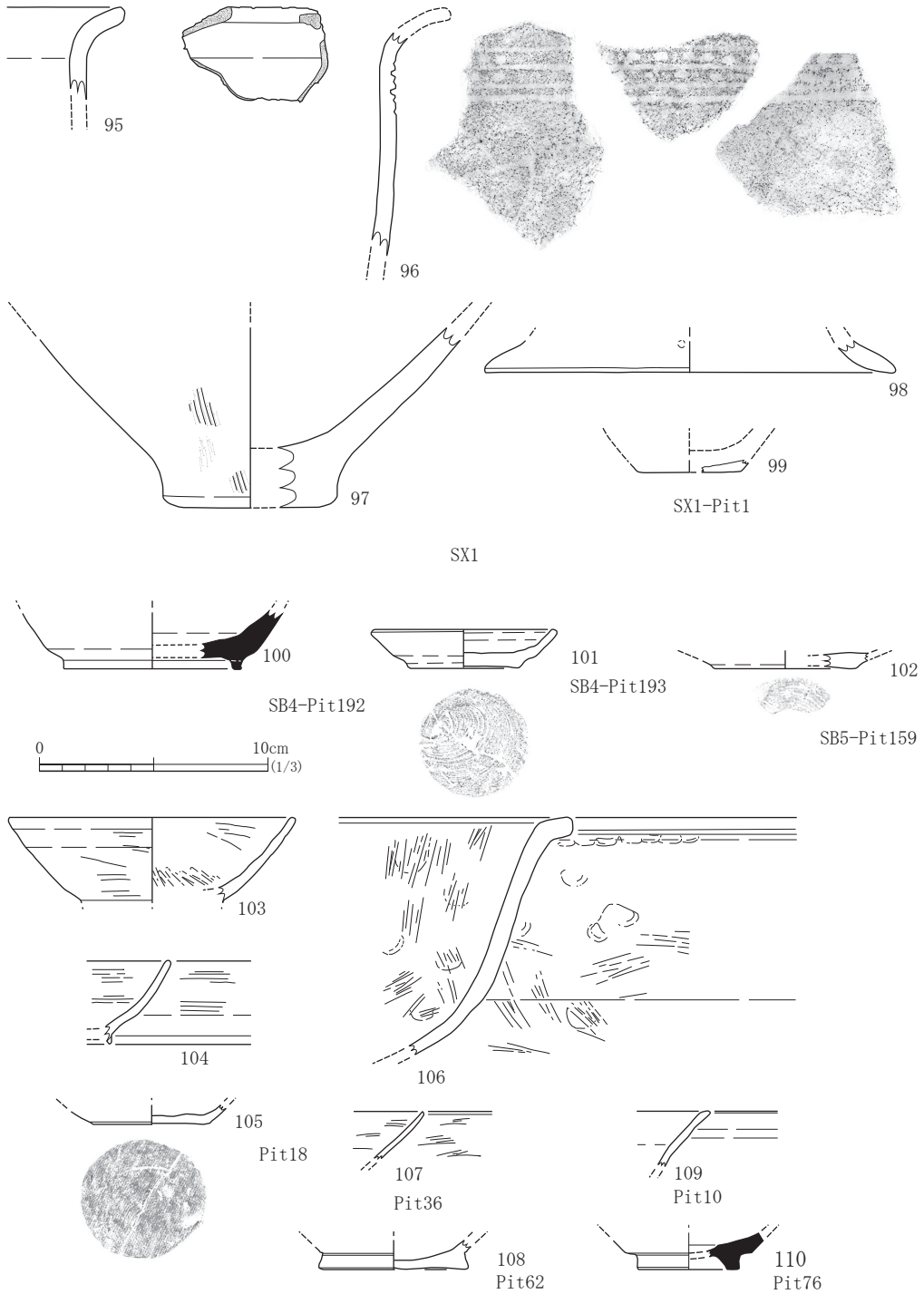


Fig.60 出土遺物実測図⑤(土器)

122～124は須恵器坏蓋。122・123は低い天井部から口縁部が屈曲し、端部が下垂する。124は端部を内側に折り曲げている。125～126は須恵器高台付坏の底部。125は焼成不良で底部－胴部の境界、126はそれよりやや内側に低い高台を付ける。125は内端・外端とも接地し、126は高台内端が下方に突出し、接地面となる。127～130は須恵器坏口縁部。131は須恵器皿口縁部か。小片のため検討の余地がある。132は須恵器長頸壺の口縁部。口縁部に段を持つ。133は須恵器高杯脚部。裾に向けて大きく広がり、端部が下垂する。134は須恵器高杯杯部。口縁端部を外側に折り曲げる。

東部第Ⅴ－2層上部出土土器 (Fig.61-135～209, Fig.62 PL.53～56)

135は土師器坏もしくは埴の底部。底部－胴部の境界に低い高台を付けたとみられるが、摩滅により詳細は不明。

136・137は須恵器坏蓋つまみ部。いずれも扁平なボタン状で中央部がやや凹む。138～165は須恵器坏蓋。138は同天井部。139～165は天井部～口縁部。139は天井部から内湾して口縁部が下垂する。140・141・143～156は口縁部がわずかに屈曲するか、屈曲せずに端部が下垂するもので、形態は多様である。142は口縁部内にかえりを持つ。157～164は口縁部が屈曲して端部が下垂する。165も口縁部が屈曲するとみられるが、端部を内側に折り曲げている。166～184は須恵器高台付坏の底部。いずれも底部－胴部の境界かやや内側に低い高台を付ける。166～170・178～181は高台内端が下方に突出し、接地面となるもので、171～177・183・184は高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地する。185は須恵器無高台坏の底部。186～199は須恵器坏口縁部。197は焼成不良。200は須恵器皿の底部。底面に回転ヘラ切り痕が残る。201は臚か。口縁部下に1条の突帯を貼り付け、その直下に櫛描波状文を2段施文する。202は須恵器で器種不明の脚部。外面中位に段があり、内端が突出する。203・204は須恵器壺の胴部。いずれも胴部中位で屈曲する長頸壺か。204は屈曲部に部分的に2条の沈線が観察できる。205は須恵器甕頸部か。外面に9条の櫛描波状文を施し、最下段に段を持つ。206は須恵器高杯脚部。207は須恵器高杯杯部。208も形態から須恵器高杯杯部か。

209は中国陶器（12世紀）の壺口縁部か。口縁部は玉縁で内外面に鉄釉を施釉する。上層からの混入である可能性が高い。

東部第Ⅴ－2層出土土器 (Fig.63-210～243, PL.57～59)

210は縄文土器深鉢。刻目突帯文土器で、突帯上の刻目は摩滅により判然としない。胴部の突帯下には二枚貝条痕が観察できる。

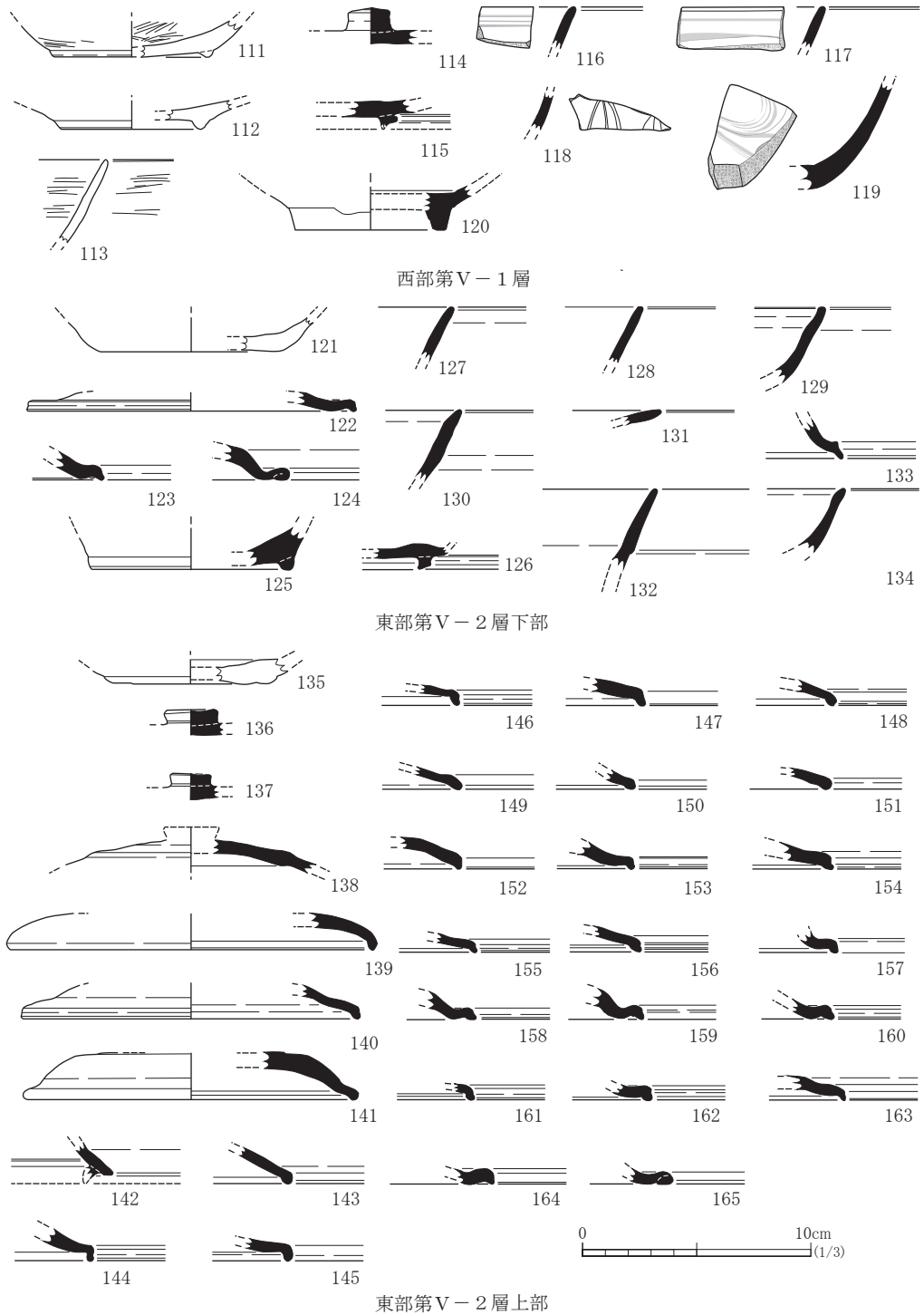
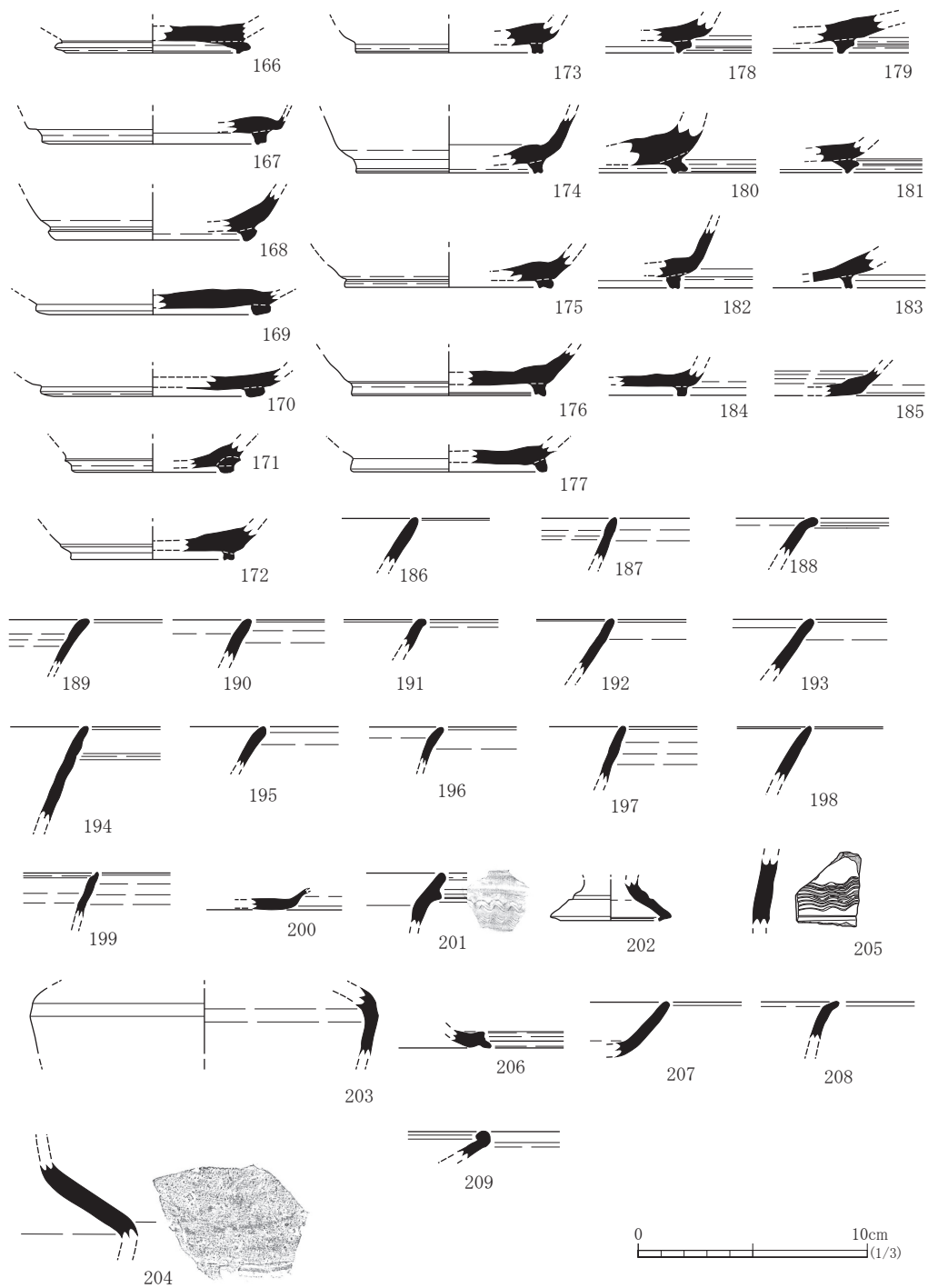


Fig.61 出土遺物実測図⑥(土器)

遺物



東部第V-2層上部

Fig.62 出土遺物実測図⑦(土器)

211 は土師器坏もしくは埴の底部。212・213 は土師器埴底部。212 は摩滅が激しい。色調が灰白色で微細な雲母を含んでおり、他地域からの搬入品とみられる。213 は底部一胴部の境界よりやや内側に低い高台を付ける。外面にヨコミガキ、内面に不定方向のミガキを施す。214 は土師器甕口縁部。

215 は須恵器坏蓋つまみ部。扁平なボタン状で中央部がやや凹む。216～221 は須恵器坏蓋の天井部～口縁部。216・219～221 は口縁部が屈曲して端部が下垂する。217 は口縁部内部にかえりを持つ。218 は屈曲せずに端部が下垂する。222・223・229～234 は須恵器高台付坏底部。いずれも底部一胴部の境界かやや内側に低い高台を付ける。231 は焼成不良。222・229～233 は高台内端が下方に突出し、接地面となるもので、223・234 は高台が内端・外端とも接地する。224～228・235～237 は須恵器無高台坏の底部。224 は摩滅のため外面の調整は不明で内面には回転ナデを施す。焼成不良。器壁が厚く、他器種である可能性がある。225・226・228 は焼成不良。238・239 は須恵器坏口縁部。240 は須恵器壺の底部か。底面から胴部が直線的に立ち上がる。241 は須恵器甕の口縁部。242・243 は須恵器高杯の口縁部。

東部第Ⅴ－2層掘削後清掃時出土土器 (Fig.63-244, PL.59)

244 は須恵器坏蓋の天井部～口縁部。口縁部が屈曲して端部が下垂する。

南東部床面清掃時出土土器 (Fig.63-245～247, PL.59)

245・246 は須恵器坏蓋のつまみ部で扁平なボタン状を呈する。247 は須恵器坏蓋口縁部。

南東部造成土出土土器 (Fig.63-248・249, PL.59)

248 は須恵器高台付坏の底部。底部一胴部の境界に断面方形の低い高台を付ける。249 は須恵器坏口縁部。

北東部造成土出土土器 (Fig.63-250, PL.59)

250 は須恵器坏蓋の天井部。つまみ部は扁平なボタン状を呈する。

南東部攪乱埋土出土土器 (Fig.63-251, PL.59)

251 は須恵器高台付坏の底部。底部一胴部の境界に断面方形の低い高台を付ける。

機械掘削時出土土器 (Fig.63-252～254, PL.59)

本来は、攪乱埋土もしくは造成土からの出土と考えられる。252 は須恵器高台付坏の底部。253 は須恵器坏の口縁部。254 は肥前系広東埴の口縁部～胴部。18世紀末～19世紀初頭。

東部第Ⅴ－2層表採土器 (Fig.63-255, PL.59)

255 は須恵器高杯の口縁部。口縁部が緩やかに屈曲し、内外面に回転ナデを施す。

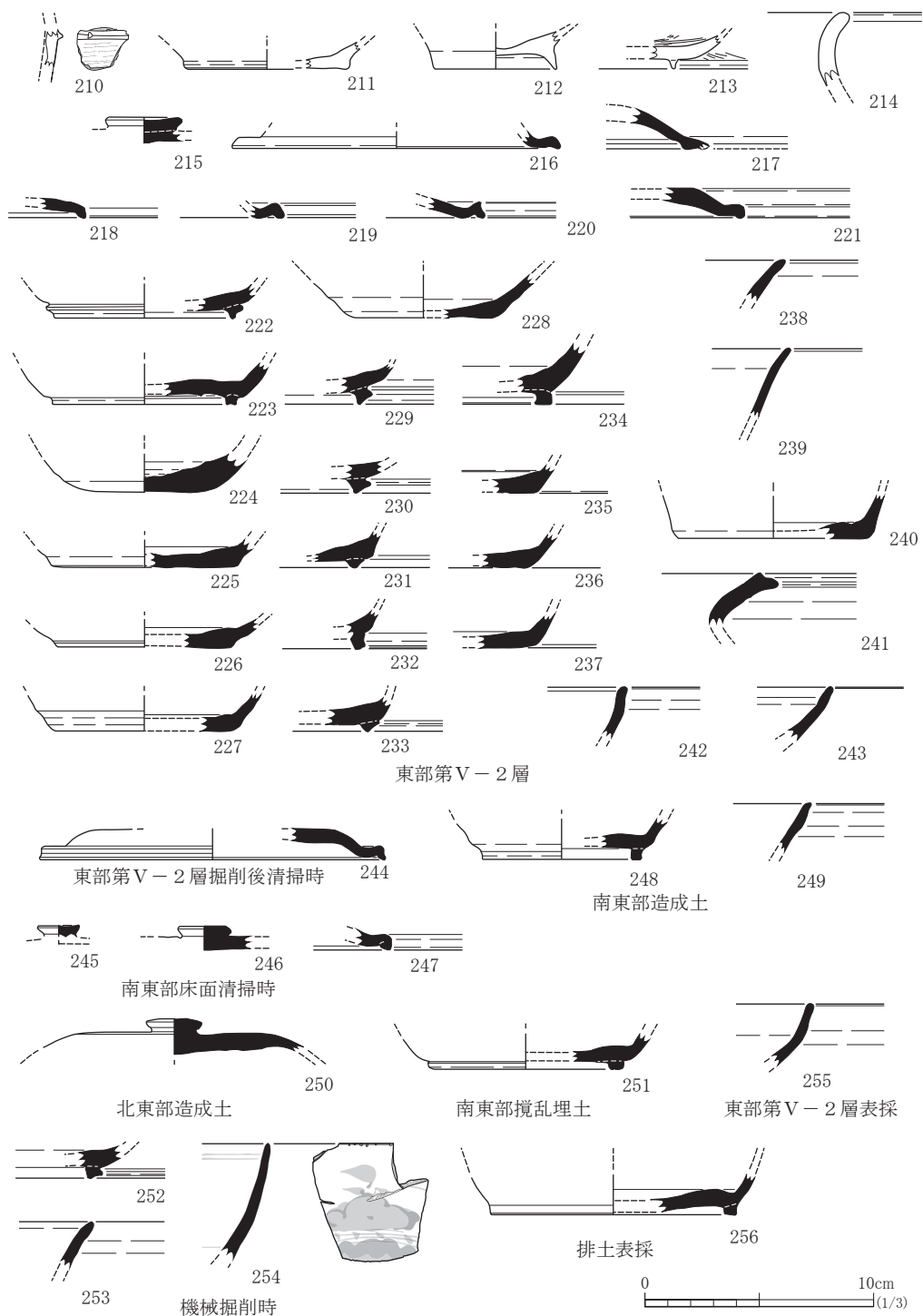


Fig.63 出土遺物実測図⑧(土器)

排土表採土器 (Fig.63-256, PL.59)

256 は須恵器高台付坏の底部。底部一胴部の境界に断面方形の低い高台を付ける。

(2) 石器・石製品

SB2-Pit370 出土石器 (Fig.64-257, PL.60)

257 は砥石で、石質は花崗斑岩。全体的に被熱しており、上面から右側面は欠損する。正面・裏面・左側面・下面を使用している。

SD1 下層出土石器 (Fig.64-258 ~ 270・Fig.65-271 ~ 273, PL.60・61)

258 ~ 265 は石鏃。石質は 258 ~ 260・262 ~ 265 が流紋岩。261 が安山岩。形態は 258 ~ 263 が凹基式、264 が平基式。265 は基部を欠損する。266・267 は石鏃もしくは石錐で、石質は安山岩。267 は周縁部のみ調整し、主要剥離面を残す。268 は石錐。石質は流紋岩で上部を欠損する。269・270 は敲石。269 の石質は石英斑岩で上下端に敲打痕がある。270 の石質は流紋岩で正面を中心に全面を使用している。271・272 は砥石。271 の石質は石英斑岩。全体的に被熱しており、使用が認められる正面・裏面以外を欠損する。272 の石質は珪長岩。上面・正面・裏面を使用し、使用痕が顕著に残る。273 は打製石鏃で、石質は緑色片岩。裏面に自然面を残す。

SD1 中層出土石器 (Fig.65-274 ~ 281・Fig.66-282・283, PL.61)

274 ~ 279 は石鏃。石質は 274 が安山岩、275 ~ 277 が流紋岩。278 は流紋岩か。279 は黒曜石¹²⁾(姫島産)。形態は 274 ~ 276 が凹基式。277 は欠損するが凹基式か。278 は平基式。279 は欠損するが平基式か。280 は石鏃未製品で、石質は流紋岩。281 は敲石で、石質は石英斑岩。上面、正面を中心に敲打痕がある。下半は欠損する。282 は台石で石質は石英斑岩。正面・右側面以外は欠損し、正面に敲打痕がある。283 は石庖丁で、石質は緑色片岩。正面・裏面の刃部に使用痕が残る。刃部以外は剥離・欠損する。

SD1 上層出土石器 (Fig.66-284 ~ 289, PL.61・62)

284 ~ 287 は石鏃。石質はいずれも流紋岩。形態は 284 ~ 286 が凹基式で 287 が平基式。288 は打製石鏃で、石質は雲母片岩。刃部を中心に使用による変形が認められる。289 は石庖丁。石質は輝緑岩か。端部以外は欠損しているほか、表面のほとんどが剥離している。両側から穿孔した紐孔が 1 箇所残存する。

SD1 南側清掃時出土石器 (Fig.66-290, PL.61)

290 は石鏃で、石質は流紋岩。形態は平基式。

SK13 出土石器 (Fig.66-291, PL.61)

遺物

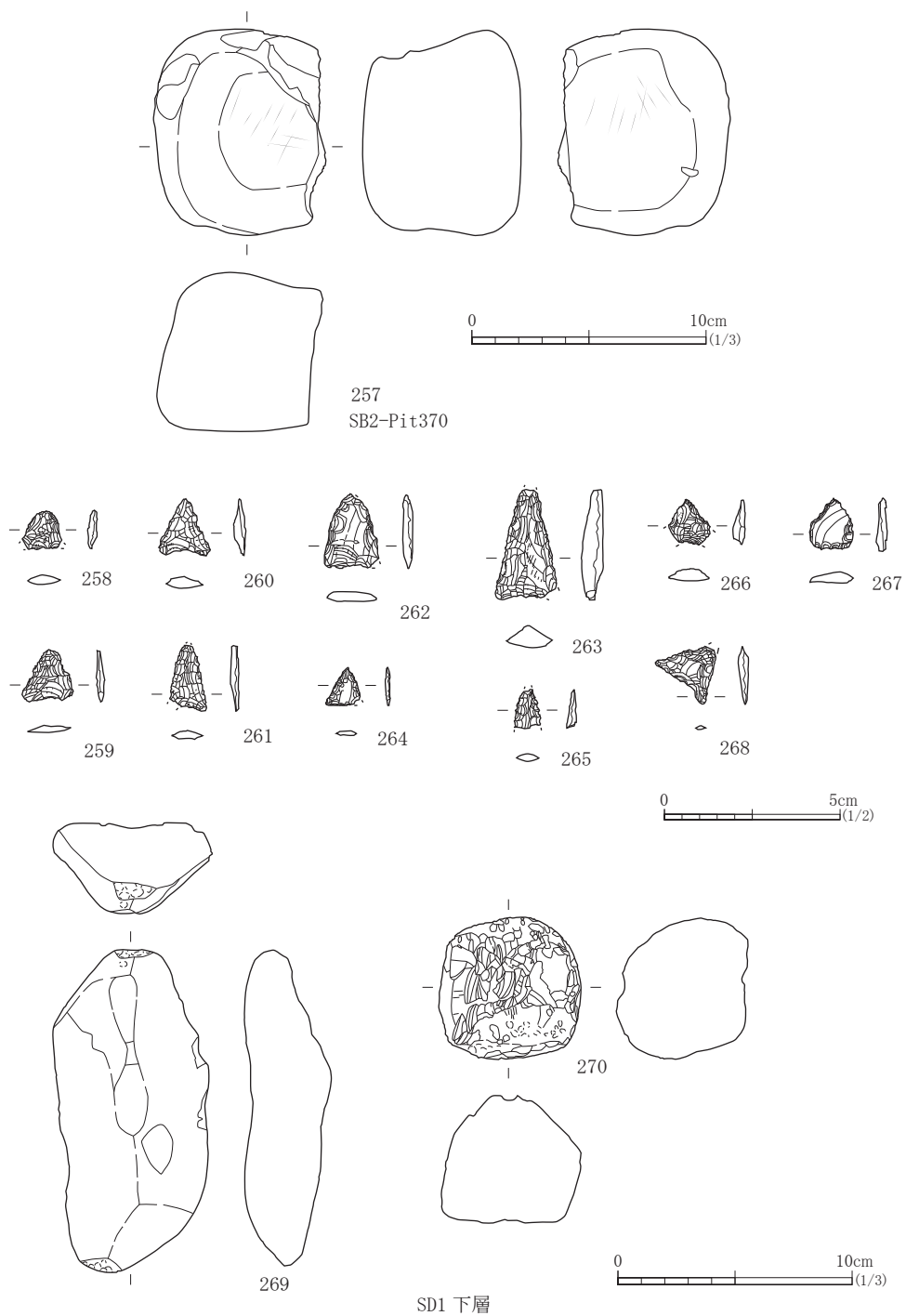
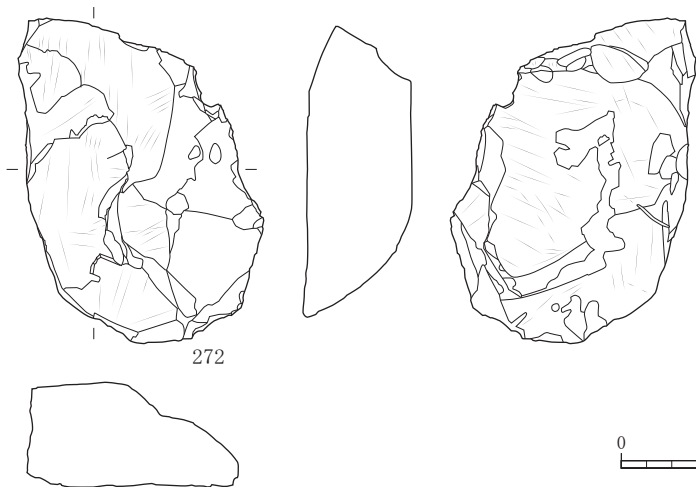
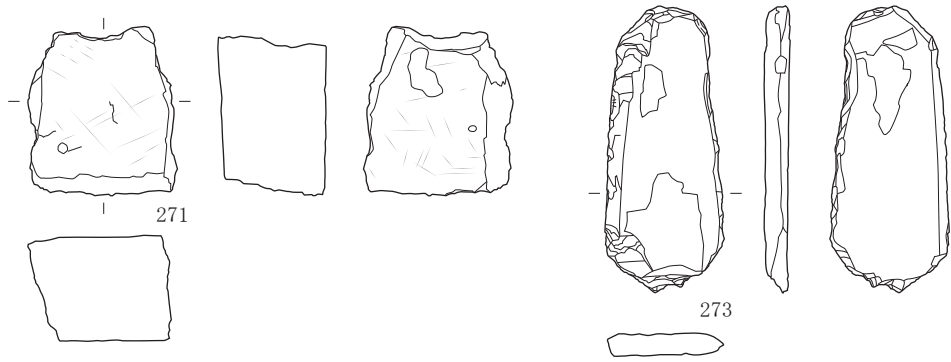
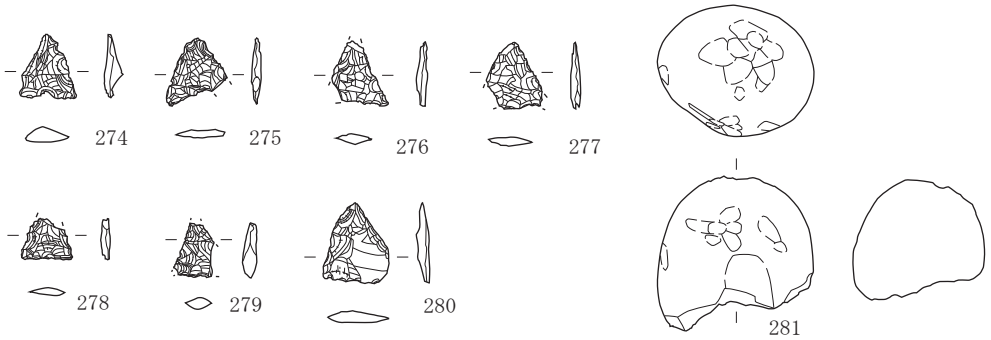


Fig.64 出土遺物実測図⑨(石器)



SD1 下層



SD1 中層

Fig.65 出土遺物実測図⑩(石器)

遺物

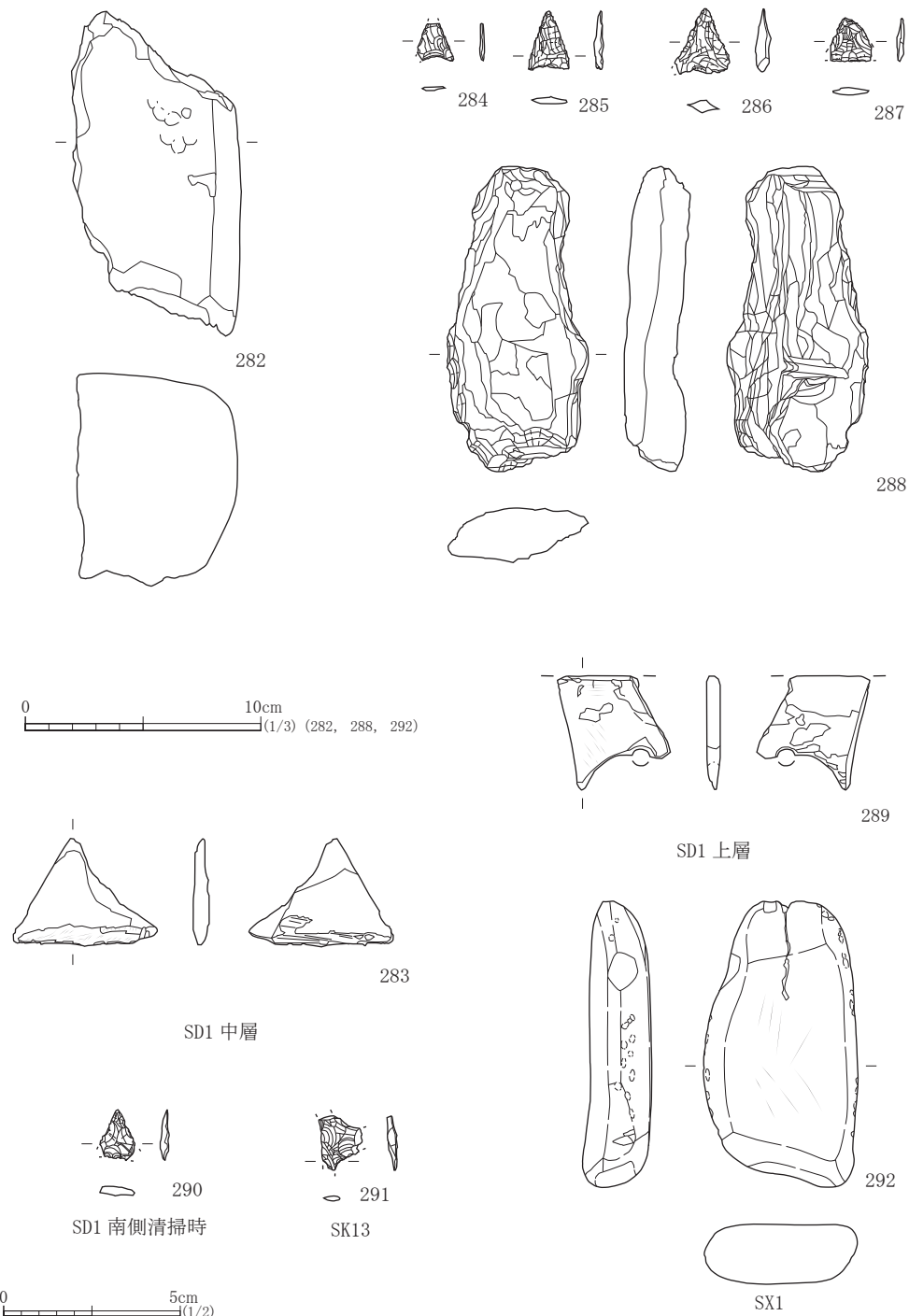


Fig.66 出土遺物実測図⑪(石器)

291 は石錐で、石質は流紋岩。欠損のため、頭部・錐部の位置は不明。

SX1 出土石器 (Fig.66-292, PL.62)

292 は砥石で、石質は玢岩。正面に使用痕が残る。また、両側面には敲打痕がある。

SX2 出土石器 (Fig.67-293, PL.62)

293 は石鏃で、石質は流紋岩。形態は平基式。

SK12 出土石器 (Fig.67-294・295, PL.62)

294 は石鏃で、石質は流紋岩。一部を欠損するが形態は平基式であろう。295 は石錐で、石質は安山岩。錐部が孤状に湾曲する。SK12 は近世以降の土坑であることから、294・295 は第Ⅴ-2層もしくは遺構埋土に含まれていたと考えられる。

西部第Ⅴ-1層出土石器 (Fig.67-296, PL.62)

296 は石鏃で、石質は流紋岩。形態は凹基式で先端を欠損する。

東部第Ⅴ-2層下部出土石器 (Fig.67-297・298, PL.62)

297・298 は石鏃。石質は 297 が流紋岩で、298 が黒曜石(姫島産)。形態はいずれも凹基式。

東部第Ⅴ-2層上部出土石器 (Fig.67-297～305, PL.62)

299～303 は石鏃。石質は 299 が安山岩、300・302・303 が流紋岩、301 が黒曜石(姫島産)。形態は 299～302 が凹基式。303 が平基式。304 は石鏃未製品。石質は流紋岩。305 は石核で、石質は黒曜石(姫島産)。円礫を使用しており、右側面・裏面に自然面を多く残す。

東部第Ⅴ-2層出土石器 (Fig.67-306～308, PL.62・63)

306 は石鏃。石質は流紋岩。形態は凹基式で基端部を欠損する。307 は砥石もしくは石座で石質は黒雲母花崗岩。全体的に被熱しており、上部の一部が欠損する。正面は使用により周縁より内側がやや凹む。左側面・裏面も使用している。308 は磨製石斧で、石質は砂岩・泥岩の互層。欠損が著しく、基部・刃部とも残存しないが、正面・裏面の一部に使用痕が残る。

西部遺構検出時出土石器 (Fig.67-309, PL.62)

309 は石鏃で、石質は安山岩。形態は凹基式で、先端部・基部の一部が欠損する。

東部床面清掃時出土石器 (Fig.67-310, PL.62)

310 は石鏃で、石質は流紋岩。形態は平基式。

南東部遺構検出時出土石器 (Fig.67-311, PL.62)

311 は石鏃で、石質は安山岩。基端が欠損するが、形態は凹基式とみられる。

西部床面清掃時出土石器 (Fig.67-312, PL.62)

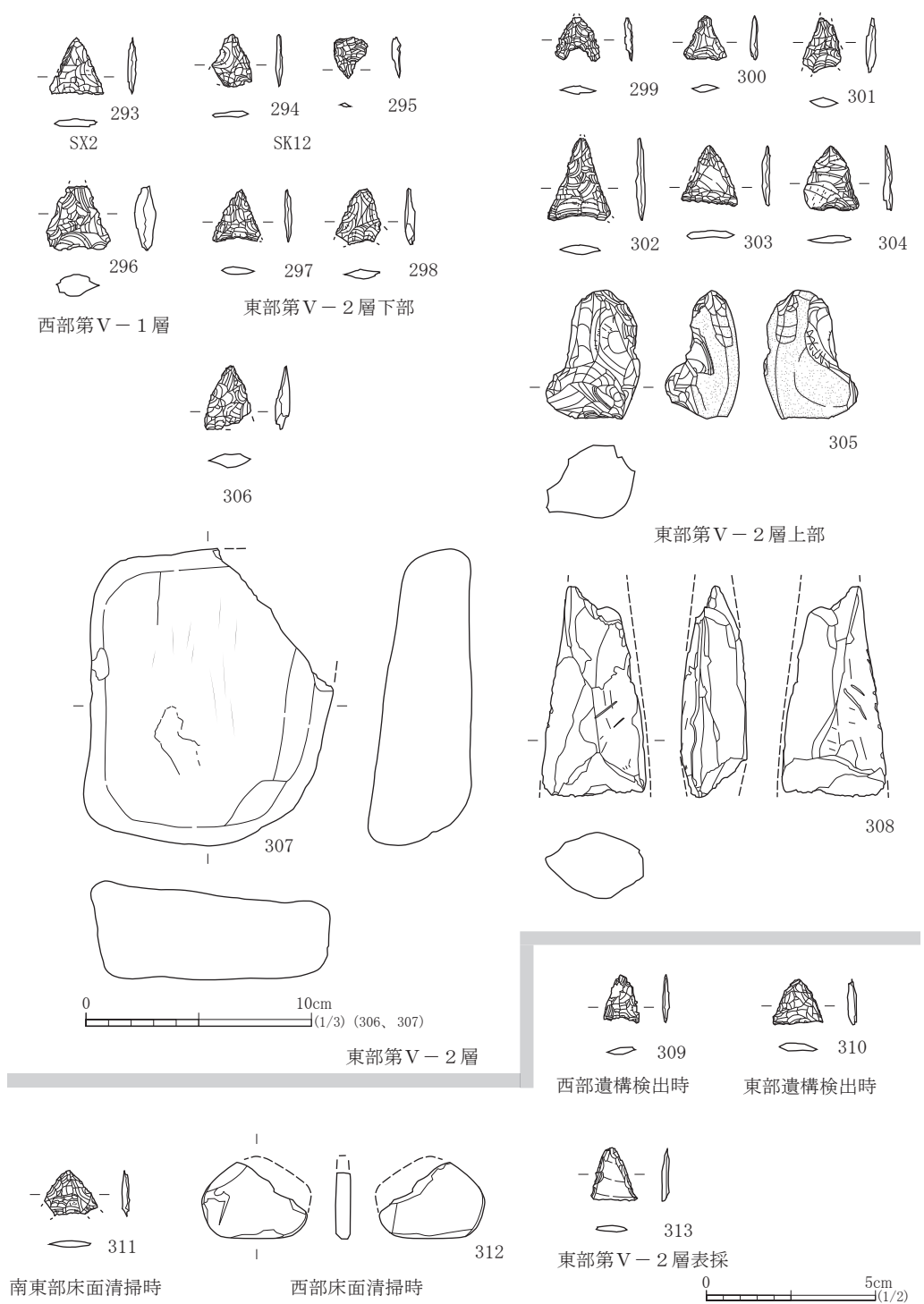


Fig.67 出土遺物実測図⑫(石器)

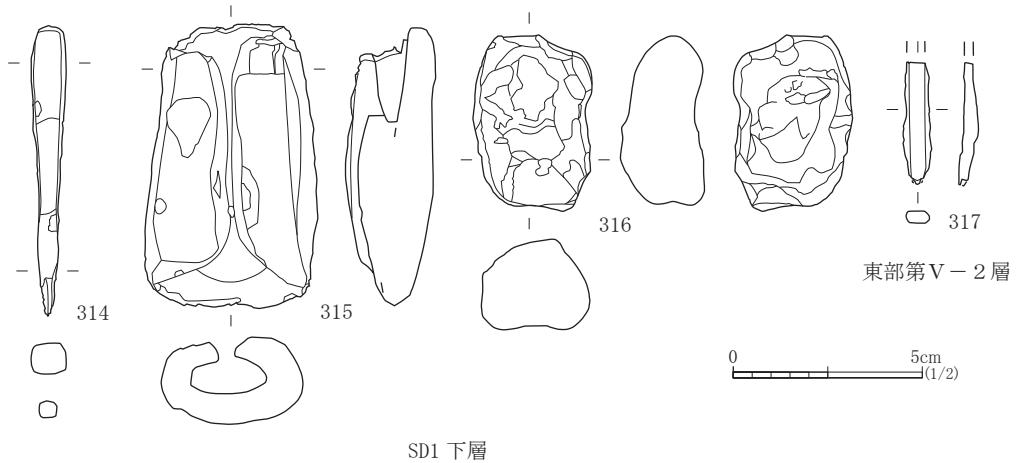


Fig.68 出土遺物実測図⑬(鉄器・鉄滓)

312は用途不明石製品で、石質は砂岩。縦幅2.25 cm、横幅3.15 cm、厚さ0.49 cmで、重量は3.29gである。端面も含めて全面を研磨する。形態は丸靱と近似するが、丸靱と比較すると薄く小さいこと、形態が宝珠形を呈する可能性もあることから、用途不明石製品としておく。¹³⁾

東部第V-2層表採石器 (Fig.67-313, PL.62)

313は石鏃で、石質は流紋岩。形態は平基式で、周縁部のみ調整し、主要剥離面を残す。

(3) 鉄製品・鉄滓

以下の鉄製品・鉄滓の図化・写真撮影は保存処理後に行った。

SD1 下層出土鉄製品・鉄滓 (Fig.68-314 ~ 316, PL.63 (2))

314は鉄釘。出土時は2点に折損しており、保存処理時に接合した。最大長7.7 cm、最大幅0.92 cm、最大厚0.8 cm、重量は6.96gである。315は袋状鉄斧。出土時は鏃の付着が顕著で種類の判別ができなかったが、保存処理後に袋状鉄斧であることが判明した。袋部の残存状況は良好だが、基部・刃部の残存状況は不良である。316は鉄滓。出土時は鏃の付着が顕著で、何らかの鉄製品と認識していたが、保存処理後に鉄滓であることが判明した。最大長4.53 cm、最大幅3.07 cm、最大厚2.34 cm、重量47.34gである。

東部第V-2層出土鉄製品 (Fig.68-317, PL.63 (2))

317は用途不明鉄製品。下端部が欠損し、上半部でやや屈曲する。最大長3.25 cm、最大幅0.78 cm、最大厚0.34 cm。重量1.99gである。

5 小結

今回の調査の成果について、時期別にまとめておきたい。

(1) 縄文～弥生時代

縄文時代では、刻目突帯文土器の深鉢胴部片が1点出土したのみである。弥生時代では調査区西部で弥生時代前期に位置づけられるSX1を検出した。このほか、SK13も弥生時代の遺構と考えられる。SX1は、周辺調査区を含めると、大学会館環境整備に伴う試掘調査¹⁴⁾で貯蔵穴（第3号土壇）が検出されたのに続く、2例目の弥生時代前期の遺構となった。また、大学会館敷地・本部2号館敷地・図書館敷地等で遺構は検出されていないものの、弥生時代前期～中期初頭の土器が出土しているため、居住域が存在したことは確実であろう。また、古代以降の遺構や包含層中からも弥生土器が出土した。時期の判別できるものはいずれも前期～中期初頭とみられる。以上から、弥生時代の遺構は古墳時代以降の遺構により破壊を受けたとみられる。一方、古代以降の遺構や包含層中からは石鏃・石庖丁、砥石、敲石、打製石鏃、打製石斧、剥片等も出土した。これらは縄文時代晩期～弥生時代中期に位置づけられるが、出土土器の状況から弥生時代前期～中期初頭が中心とみられる。このうち、石鏃については、石錐の可能性のあるもの2点を含めて39点の石鏃を報告した。石鏃は上記以外にSD1中層から2点出土しているほか、SD1下層から石鏃の可能性のある石器が1点出土している。隣接する第I地区E区では14点の石鏃が報告されており、¹⁵⁾両者を合わせると50点以上の出土となる。今回出土した石鏃には未製品も含まれ、剥片も多数出土していることから、石器製作が行われていたと考えられる。

(2) 古墳時代

遺構は調査区西部で古墳時代中期のピット1基（Pit15）を検出したのみで、同ピットから高杯脚部が出土したほか、遺物はほとんど出土していない。

(3) 古代

掘立柱建物跡2棟、溝1条、多数のピットを検出したほか、詳細な時期は不明だが古代以前の溝3条、土坑6基、不明遺構3基を検出した。遺物は土師器、須恵器があるが、SD1から出土した鉄製品・鉄滓・東部第V-2層から出土した不明鉄製品も当該期のものであろう。このほか、SD1から出土した砥石類も当該期のものが主体であろう。

吉田遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されたのは、今回の調査が初である。調査区東部ではこのほかにも古代とみられるピットを複数検出しており、本来はさらに掘立柱建物跡が存在した可能性が高い。SD1は第I地区E区で検出された「溝状遺構」の延長部である

ことが判明した。今回調査区内における検出長は 13.76 m、幅 3.17 ～ 5.07 m、深さ 0.31 ～ 0.62 m で、吉田遺跡調査団による調査分を含めた長さは約 49.2 m である。流路方向は N17° W で、SB1 の梁行方向 N8° W と近似する。当初は流水していたと考えられるが、掘り直しの痕跡がなく、下層と上層の遺物に顕著な時期差がないことから、掘削後、間もなく埋没が開始したようである。SD1 から出土した須恵器は小片が多いが、坏蓋の形態等から 9 世紀でも後半が主体とみられ、9 世紀代のうちにほぼ埋没したと推測する。上層から出土した土師器塚の位置づけが問題になるが、前述のように埋没後に掘り込まれたピットに含まれていたか、窪地となった最終段階に廃棄された可能性がある。SB1・2 から出土した須恵器は小片だが、SB2-Pit371 から出土した須恵器坏蓋片 (Fig. 56-5) は近似したものが SD1 から出土している。また、今回調査区内で SD1 より西側には確実な古代の遺構がないが、東側には SB1・2 やピットといった遺構があり、8 世紀後半～9 世紀前半の須恵器を多量に含む第 V-2 層が存在する。

第2 学生食堂東側に隣接する農学部実験畑では、第2 学生食堂新営その他に伴う屋外電力線路施設整備工事 (平成 11 年度調査) で古代の遺物包含層・ピットが検出され、農学部果樹園排水工事に伴う立会調査 (平成 28 年度調査) で古代以前のピットや土壌群、堅穴式住居の可能性のある大型遺構が検出されている¹⁶⁾。さらに今回調査区東端から約 70 m 東に位置する農学部農業環境観測実験施設敷地でも、土坑 3 基 (掘立柱建物跡の柱穴か)・溝 1 条が検出されていることから、第2 学生食堂の東側一帯に古代の遺構・遺物が分布することは確実である。以上と、SD1 の直線的な形状から、SD1 は掘立柱建物等の施設を区画するための溝であったと位置づけたい。一方、今回調査区より西側においても、明確な遺構はないものの、土器類のほか、遺跡保存公園・大学会館敷地では「冨」の墨書がある須恵器坏¹⁸⁾、石製丸靱¹⁹⁾、図書館敷地では青銅製丸靱²⁰⁾といった特殊な遺物も出土している。上記の遺物を踏まえれば、今回検出された SD1、SB1・2 は何らかの官衙関連施設の一部であると考えられる。近年、農学部動物医療センター周辺では 7 世紀後半～9 世紀代の遺構・遺物が確認されているが²¹⁾、今回調査で確認した遺構・遺物には 7 世紀後半～8 世紀前半の遺物はほとんどなく、官衙関連施設の変遷についても検討が必要である。

(4) 中世

掘立柱建物跡 5 棟、溝 1 条、多数のピットのほか、土坑 5 基を検出した。吉田遺跡で中世の掘立柱建物跡が確認されたのも今回が初である。掘立柱建物跡のうち、SB5 は他の掘立柱建物跡と棟方向が異なるほか、SB6 と重複する。

SB5～7は柱穴の一部を第V-1層除去後に検出している。第V-1層出土遺物には、高台が小さな三角形状を呈する土師器壺（Fig. 61-111・112）や、12世紀後半～13世紀中頃の輸入陶磁器片（Fig. 61-116～120）を含むが、14世紀～17世紀前半の防長型瓦質土器を含まない。以上から、SB5～7の年代は12～13世紀と推測する。棟方向が近似するSB3・SB4の年代も上記の範疇でとらえておきたい。

調査区東部で検出されたSD2は出土遺物が僅少なため詳細な時期については検討の余地があるが、流路方向はN25°Wで、西側に位置するSB3・4・6・7の梁行方向と近似することから、これらの掘立柱建物を区画していた溝である可能性が高い。

(5) 近世以降

近世以降、統合移転直前まで存在した棚田に関連するとみられる溝7条、土坑3基、複数のピットを検出し、陶磁器類が若干出土した。このほか、吉田遺跡調査団のトレンチを検出した。後者については付篇を参照されたい。

[注]

- 1) 時間的な都合により、調査区南東隅では等高線の測量を行っていない。
- 2) 豆谷和之「付篇Ⅰ 第1章 吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』、1994年）・本書付篇。
- 3) ただし、調査区東部を中心に樹根など遺構ではないものが含まれる可能性がある。
- 4) SD1東岸付近で検出されたピットは黒褐色粘質土であるが、SD1は削平を考慮するとさらに東へ広がっていたと考えられるので、その埋土を含んでいざ可能性が高い。また、Pit208のようにSD1埋没後の掘立柱建物跡を構成するものもあることから、これらのピットは中世に含めた。ただし、上記のピットからほとんど遺物が出土しなかったため、検討の余地がある。
- 5) 前掲注2文献
- 6) 前掲注2文献
- 7) 『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』Fig. 80の復元案を訂正する。
- 8) 前掲注2文献
- 9) 前掲注2文献
- 10) 平成14年頃、元防府市教育委員会 大林達夫氏よりご教示を得た。
- 11) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『九州歴史資料館研究論集』4、1978年）
- 12) 今回の調査で石質が黒曜石と鑑定された石鎌・石核は乳白色を呈し、姫島産黒曜石と言われるもので

ある。遺物観察表の「姫島産」は田畑が付記した。

- 13) 防府市教育委員会 杉原和恵氏よりご教示を得た。
- 14) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)
- 15) 前掲注2文献
- 16) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部果樹園排水工事に伴う立会調査」(『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成28年度－』、2021年)
- 17) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部農業環境観測実験施設新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年)
- 18) 杉原和恵「墨で文字を書きこんだうつわー既刊の報告 補訂ー」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年)
- 19) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年)
- 20) 山口大学埋蔵文化財資料館「図書館改修工事及び環境整備(図書館周辺道路迂回)工事に伴う本発掘調査」(『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』、2016年)
- 21) 山口大学埋蔵文化財資料館「農学部附属家畜病院Ⅰ期改修工事に伴う本発掘調査」(『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』、2010年)ほか

Tab.6 掘立柱建物跡観察表

()は復元値

遺構番号	棟方向	規模 (m) (桁行×梁行)	面積 (㎡)	出土遺物	備考
SB1	N82° E	3間 (5.83) × 2間 (3.81)	(22.2)	土師器、須恵器、剥片	古代 一部破壊
SB2	N2° E	2間 (2.0)以上×2間 (3.0)	6以上	弥生土器、土師器、須恵器、焼土塊、剥片	古代 一部破壊・調査区外
SB3	N72° E	1間 (2.5) × 1間 (2.2)	5.5	須恵器	中世
SB4	N71° E	2間 (4.3) × 2間 (3.3)	(14.2)	土師器、須恵器	中世 一部破壊
SB5	N7° E	2間 (3.6) × 2間 (3.2)	11.5	土師器、須恵器、青磁、剥片	中世
SB6	N70° E	2間 (5.0) × 2間 (4.1)	20.5	土師器	中世
SB7	N72° E	2間 (3.7) × 2間 (2.9)	(10.7)	土師器	中世 一部破壊

Tab.7 溝・土坑・不明遺構観察表

()は残存値

種類	遺構番号	平面形	規模			出土遺物	備考
			長さ/長軸	幅/短軸	深さ		
			(cm)	(cm)	(cm)		
溝	SD1		(1376)	317~507	31~62	土師器、須恵器、土鏝、石鏝、石錐、敲石、砥石、石鍬、台石、石包丁、剥片、鉄釘、鉄斧	古代 深さは断面図最深部のデータ
溝	SD2		(669)	46~82	6~9	土師器、須恵器、青磁、剥片	中世
溝	SD3		112	12~28	6		近世~統合移転前の水田暗渠
溝	SD4		(2120)	3~39	3~5	須恵器	近世~統合移転前の水田暗渠・一部破壊
溝	SD5		170	6~10	3		近世~統合移転前の耕作溝
溝	SD6		86	18~22	8		近世~統合移転前の水田暗渠
溝	SD7		177	8~14	3~6		近世~統合移転前の水田暗渠
溝	SD8		(118)	29~45	1~4		近世~統合移転前の水田暗渠
溝	SD9		(127)	11	3	弥生土器もしくは土師器	古代以前
溝	SD10		(50)	14	2		古代以前 SD11に切られる
溝	SD11		(44)	11	3	土師器	古代以前 SD10を切る
溝	SD12		(183)	7~41	2~18		近世~統合移転前の水田暗渠
土坑	SK1	楕円形	69	63	49	弥生土器もしくは土師器	古代以前
土坑	SK2	溝状	(282)	25~63	5	弥生土器もしくは土師器、須恵器、剥片	中世
土坑	SK3	不整形	62	30	15		中世
土坑	SK4	不整形	118	60	9		中世
土坑	SK5	不整形	278	207	18	土師器、須恵器	近世~統合移転前
土坑	SK6	隅丸方形	100	90	13	弥生土器もしくは土師器、須恵器、剥片	近世~統合移転前
土坑	SK7	不整形	133	(75)	5~9	土師器、須恵器、砥石	中世 SK8を切る
土坑	SK8	不整形	60	(53)	8	土師器	中世 SK7・SD4に切られる
土坑	SK9	楕円形	69	49	4		古代以前

第2学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査

種類	遺構番号	平面形	規模			出土遺物	備考
			長さ/長軸	幅/短軸	深さ		
			(cm)	(cm)	(cm)		
土坑	SK10	楕円形	87	73	32	土師器、須恵器、磁器、石鏃、石錐、剥片	近世～統合移転前
土坑	SK11	不整形	75	9～20	6		古代以前
土坑	SK12	溝状	(245)	94	27	弥生土器もしくは土師器、須恵器、砥石、剥片	古代以前 SX2を切り、SB2に切られる
土坑	SK13	長方形	166	63	8～15	弥生土器、土師器、石錐、剥片	弥生 土師器は混入か
土坑	SK14	溝状	44	10	13		古代以前
不明遺構	SX1	不整形	(320)	(240)	1～10	弥生土器、土師器、須恵器、砥石、焼土塊	弥生前期 一部破壊 土師器・須恵器は混入か 長軸、短軸は推定
不明遺構	SX2	不整形	(238)	(178)	4～10	弥生土器もしくは土師器、須恵器、石鏃、剥片	古代以前 一部破壊 長軸は断面A-B間、短軸はC-D間
不明遺構	SX3	不整形	(134)	(92)	6		古代以前 SK12に切られる短軸はA-B間
不明遺構	SX4	不整形	158	(97)	2～8	弥生土器もしくは土師器	古代以前

Tab.8 出土遺物観察表(土器)

量()は復元値

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1	SB1-Pit227		須恵器 坏	底部				①②灰白色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
2	SB1-Pit232		須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を少量含む	
3	SB1-Pit234		須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
4	SB2-Pit373		土師器 坏	口縁部				①②黄橙色	0.5mmの砂粒を少量含む	
5	SB2-Pit371		須恵器 坏蓋	口縁部				①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
6	SB2-Pit370		須恵器 坏	口縁部				①②灰色	精良	
7	SD1-1区	下層	弥生土器 壺	胴部				①橙色 ②黄褐色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	
8	SD1-1区	下層	弥生土器 甕	底部		(6.9)		①橙色 ②灰白色	0.5～6.0mmの砂粒を多く含む	
9	SD1-1区	下層	弥生土器 甕	底部		(6.6)		①にぶい黄褐色 ②橙色	0.5～5.0mmの砂粒を多く含む	
10	SD1-3区	下層	弥生土器 甕	底部		(7.7)		①にぶい黄色 ②橙色	0.5～5.0mmの砂粒を多く含む	
11	SD1-3区	下層	須恵器 坏蓋	天井部				①②青灰色	0.5～2.5mmの砂粒を少量含む	つまみ径3.1cm
12	SD1-4区	下層	須恵器 坏蓋	天井部				①②オリーブ灰色	精良	つまみ径3.1cm
13	SD1-2区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		(5.8)		①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を少量含む	
14	SD1-2・3区	下層	須恵器 高台付坏	口縁～底部	12.6	(6.8)	4.7	①②暗青灰色	0.5～2.0mmの砂粒をやや多く含む	
15	SD1-3区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		6.7		①明青灰色 ②灰色	0.5～3.0mmの砂粒をやや多く含む	
16	SD1-3区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		(7.4)		①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
17	SD1-3区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		(7.8)		①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
18	SD1-3区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		(8.1)		①②灰黄色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
19	SD1-1区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		(9.2)		①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
20	SD1-1区	下層	須恵器 高台付坏	胴～底部		(9.5)		①②灰色	精良	

出土遺物観察表

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考	
21	SD1-3区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(9.4)	①②灰色	精良		
22	SD1-3区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(6.8)	①②青灰色	0.5～3.0mmの砂粒を やや多く含む		
23	SD1-3区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(7.5)	①灰色 ②青灰色	0.5～2.5mmの砂粒を 少量含む		
24	SD1-1区	下層	須恵器	坏	胴～ 底部		(8.8)	①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
25	SD1-4区	下層	須恵器	坏	胴～ 底部		(8.6)	①浅黄色 ②淡黄色	0.5～1.0mmの砂粒 少量含む		
26	SD1-3区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部			①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
27	SD1-2区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部			①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒 少量含む		
28	SD1-3区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部			①灰色 ②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
29	SD1-1区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部			①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
30	SD1-3区	下層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部			①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
31	SD1-1区	下層	須恵器	坏	胴～ 底部			①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
32	SD1-3区	下層	須恵器	坏	口縁部			①②灰色	精良		
33	SD1-2区	下層	須恵器	坏	口縁部			①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
34	SD1-4区	下層	須恵器	壺	底部		(12.0)	①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む		
35	SD1-4区	下層	須恵器	壺	胴～ 底部			①②灰色	精良		
36	SD1-4区	下層	須恵器	壺	底部			①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
37	SD1-4区	下層	須恵器	甕	口縁部			①②灰黄色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む		
38	SD1-3区	下・中層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(6.5)	①②灰白色	0.5～3.0mmの砂粒を 少量含む		
39	SD1- 2～4区	下・中層	須恵器	高台付 坏	口縁部 ～底部	(12.7)	(7.2)	5.5	①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を 多く含む	
40	SD1- 2・3区	下・中層	須恵器	高台付 坏	口縁部 ～底部	(11.3)	6.9	4.65	①灰白色 ②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
41	SD1- 3・4区	下・中層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(7.0)		①②灰色	0.5～3.0mmの砂粒を 少量含む	
42	SD1-3区	中層	弥生土器	甕	底部		5.0		①黒褐色 ②にぶい黄褐色	0.5～3.0mmの砂粒を 多く含む	
43	SD1-2区	中層	土師器	坏	胴～ 底部		(6.2)		①②灰白色	0.5～3.0mmの砂粒を やや多く含む	
44	SD1-2区	中層	土師器	坏	胴～ 底部		(6.6)		①にぶい褐色 ②浅黄褐色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
45	SD1-1区	中層	土師器	坏	胴～ 底部		(6.3)		①灰黄褐色 ②褐灰色	0.5～2.0mmの砂粒を やや多く含む	
46	SD1-4区	中層	土師器	坏	胴～ 底部		(8.6)		①浅黄色 ②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
47	SD1-3区	中層	土師器	皿	胴～ 底部		(5.4)		①にぶい黄褐色 ②灰黄色	0.5～3.0mmの砂粒を 少量含む	SD1埋没後の遺構に 伴う可能性が高い
48	SD1-1区	中層	土師器	甕	口縁部				①にぶい黄褐色 ②浅黄色	0.5～2.0mmの砂粒を 多く含む	49と同一か
49	SD1-1区	中層	土師器	甕	胴部				①にぶい黄褐色 ②浅黄色	0.5～2.0mmの砂粒を 多く含む	48と同一か
50	SD1-3区	中層	須恵器	坏蓋	天井部				①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	つまみ径2.2cm
51	SD1-3区	中層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(7.8)		①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
52	SD1-3区	中層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(6.0)		①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
53	SD1- 3・4区	中層	須恵器	高台付 坏	口縁部 ～底部	(13.3)	(6.9)	5.3	①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
54	SD1-3区	中層	須恵器	高台付 坏	胴～ 底部		(9.9)		①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	

第2学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
55	SD1-3区	中層	須恵器 高台付 坏	胴～ 底部		(10.4)		①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
56	SD1-3区	中層	須恵器 高台付 坏	胴～ 底部		(9.9)		①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
57	SD1-2区	中層	須恵器 坏	胴～ 底部		(8.4)		①②灰色	精良	
58	SD1-1区	中層	須恵器 坏	胴～ 底部				①②明オリ ブ灰色	0.5～1.5mmの砂粒を 少量含む	
59	SD1-3区	中層	須恵器 坏	口縁部	(15.4)			①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
60	SD1-1区	中層	須恵器 坏	口縁部				①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
61	SD1-3区	中層	須恵器 長頸壺	胴部				①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
62	SD1-3区	中層	須恵器 壺	底部				①青灰色 ②明青灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
63	SD1-3区	中層	須恵器 甕	口縁部				①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
65	SD1-3区	上層	弥生土器 壺もし くは鉢	底部		(11.0)		①② にぶい黄色	0.5～4.0mmの砂粒を 多く含む	
66	SD1-1区	上層	弥生土器 甕	底部		(10.5)		①② にぶい橙色	0.5～3.0mmの砂粒を 多く含む	
67	SD1	上層	土師器 高台付 坏	底部				①② 灰オリブ色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
68	SD1-2区	上層	土師器 坏	底部		(6.5)		①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
69	SD1-4区	上層	土師器 坏もし くは皿	底部		4.2		①② にぶい黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
70	SD1-1区	上層	土師器 坏	口縁部				①②浅黄橙色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
71	SD1-1区	上層	土師器 甕	口縁部 ～胴部	(25.2)			①② にぶい淡黄色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
72	SD1-1区	上層	須恵器 坏蓋	天井部				①灰黄色 ②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	つまみ径2.5cm
73	SD1-2区	上層	須恵器 坏蓋	天井部～ 口縁部	(12.4)			①青灰色 ②赤灰色	0.5～2.5mmの砂粒を 少量含む	
74	SD1-2区	上層	須恵器 坏蓋	天井部～ 口縁部	(12.9)			①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
75	SD1-1区	上層	須恵器 坏蓋	天井部～ 口縁部				①明オリ ブ灰色②灰色	精良	
76	SD1-2区	上層	須恵器 坏蓋	天井部～ 口縁部				①暗青灰 色②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
77	SD1-2区	上層	須恵器 高台付 坏	胴部～ 底部	(8.0)			①② にぶい黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	
78	SD1-1区	上層	須恵器 高台付 坏	胴部～ 底部				①灰白 色②にぶい黄色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
79	SD1-2区	上層	須恵器 皿	口縁部 ～底部	(13.9)	(5.4)	1.7	①黄灰 色②灰色	0.5～2.5mmの砂粒を 少量含む	
80	SD1-1区	上層	須恵器 甕か	頸部か				①灰色 ②灰白 色	精良	
81	Pit15		土師器 高坏	脚部				①②橙 色	0.5～4.0mmの砂粒を 多く含む	
82	Pit273		須恵器 坏蓋	口縁部				①灰色 ②明青 灰色	0.5～1.5mmの砂粒を 少量含む	
83	SK13		弥生土器 甕	口縁部				①黄橙 色②淡 黄色	0.5～2.5mmの砂粒を 多く含む	
84	SX1		弥生土器 壺	口縁部	(16.0)			①にぶい 黄色 ②黒色	0.5～3.0mmの砂粒を 多く含む	
85	SX1		弥生土器 壺	口縁部 ～頸部	(17.0)			①にぶい 黄橙 色②灰 白色	0.5～4.0mmの砂粒を 多く含む	
86	SX1		弥生土器 壺	口縁部 ～頸部	(18.6)			①にぶい 黄橙 色②浅 黄橙 色	0.5～3.0mmの砂粒を 多く含む	
87	SX1		弥生土器 壺	口縁部				①②橙 色	0.5～4.0mmの砂粒を 多く含む	
88	SX1		弥生土器 壺	頸部～ 胴部				①にぶい 黄褐 色②灰 オリ ブ色	0.5～3.0mmの砂粒を 多く含む	
89	SX1		弥生土器 壺	胴部				①にぶい 黄橙 色②浅 黄橙 色	0.5～3.0mmの砂粒を 多く含む	

出土遺物観察表

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
90	SX1		弥生土器 壺	頸部～胴部				①にぶい黄橙色 ②褐灰色	0.5～5.0mmの砂粒を多く含む	
91	SX1		弥生土器 壺	胴部				①にぶい黄橙色 ②浅黄橙色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	92と同一個体か
92	SX1		弥生土器 壺	胴部				①にぶい褐色 ②にぶい橙色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	91と同一個体か
93	SX1		弥生土器 壺	胴部				①にぶい橙色 ②淡黄色	0.5～10mmの砂粒を多く含む	
94	SX1		弥生土器 壺	胴部				①橙色 ②にぶい橙色	0.5～5.0mmの砂粒を多く含む	
95	SX1		弥生土器 甕もしくは鉢	口縁部				①灰白色 ②黄橙色	0.5～5.0mmの砂粒を多く含む	96・97と同一か
96	SX1		弥生土器 甕	口縁部～胴部				①黄褐色 ②黒褐色	0.5～5.0mmの砂粒を多く含む	95・97と同一か
97	SX1		弥生土器 甕	底部		(7.7)		①にぶい黄褐色 ②にぶい褐色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	95・96と同一か
98	SX1		弥生土器 蓋	口縁部	(18.1)			①②黄灰色	0.5～4.0mmの砂粒を多く含む	紐孔あり
99	SX1-Pit1		弥生土器 壺もしくは鉢	底部	(4.6)			①淡黄色 ②灰黄色	0.5～3.0mmの砂粒を多く含む	
100	SB4-Pit192		須恵器 高台付坏	胴部～底部		(7.8)		①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	本来はSD1埋土包含まれ遺物か
101	SB4-Pit193		土師器 皿	口縁部～底部	8.2	4.75	1.75	①②橙色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
102	SB5-Pit159		土師器 皿	底部		(6.1)		①②橙色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
103	Pit18		土師器 埴	口縁部～底部	(12.6)			①②にぶい黄橙色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
104	Pit18		土師器 埴	口縁部～底部				①②にぶい黄橙色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
105	Pit18		土師器 皿	底部		(4.1)		①にぶい黄橙色 ②灰白色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
106	Pit18		土師器 鍋	口縁部～胴部				①黄灰色 ②黄褐色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
107	Pit36		土師器 皿	口縁部～胴部				①②浅黄橙・灰白色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
108	Pit62		土師器 埴もしくは皿	底部		(6.6)		①②灰白・橙色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
109	Pit10		土師器 埴	口縁部～胴部				①橙色 ②浅黄褐色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
110	Pit76		陶器 碗	底部		(4.5)		素地：にぶい黄色 釉：浅黄色	精良	萩焼
111	西部	第V-1層 (SX1検出時)	土師器 埴	底部		(6.8)		①②灰白色	0.5～2.5mmの砂粒を少量含む	
112	西部	第V-1層	土師器 埴	底部		(6.0)		①②黄褐色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
113	西部	第V-1層	土師器 埴	口縁部				①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を多く含む	
114	西部	第V-1層	須恵器 坏蓋	天井部				①②青灰色	0.5～3.5mmの砂粒を少量含む	つまみ径1.8cm
115	西部	第V-1層	須恵器 高台付坏	底部				①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
116	西部	第V-1層	青磁 碗	口縁部				素地：灰白色 釉：オリーブ灰色	精良	龍泉窯系
117	西部	第V-1層	青磁 碗	口縁部				素地：灰色 釉：オリーブ灰色	精良	龍泉窯系
118	西部	第V-1層 (SD1検出時)	青磁 碗	胴部				素地：灰白色 釉：オリーブ黄色	精良	龍泉窯系
119	西部	第V-1層	青磁 碗	胴部				素地：灰色 釉：灰オリーブ色	精良	龍泉窯系
120	西部	第V-1層	白磁 碗	底部				素地：淡黄色 釉：オリーブ黄色	精良	
121	東部	第V-2層 下部	土師器 坏	底部		(7.7)		①②浅黄褐色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	須恵器焼成不良品の可能性あり
122	東部	第V-2層 下部	須恵器 坏蓋	口縁部	(15.2)			①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
123	東部	第V-2層 下部	須恵器 坏蓋	口縁部				①②明青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	

第2学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
124	東部	第V-2層下部	須恵器 坏蓋	口縁部				①②灰白色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	
125	東部	第V-2層下部	須恵器 高台付坏	底部		(8.6)		①浅黄橙色 ②にぶい橙色	0.5~2.5mmの砂粒を少量含む	焼成不良
126	東部	第V-2層下部	須恵器 高台付坏	底部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
127	東部	第V-2層下部	須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
128	東部	第V-2層下部	須恵器 坏	口縁部				①②緑灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
129	東部	第V-2層下部	須恵器 坏	口縁部				①②明青灰色	0.5~3.5mmの砂粒を少量含む	
130	東部	第V-2層下部	須恵器 坏	口縁部				①②明青灰色	0.5~2.5mmの砂粒を少量含む	
131	東部	第V-2層下部	須恵器 皿か	口縁部				①緑灰色 ②明青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
132	東部	第V-2層下部	須恵器 壺	口縁部				①②灰白色	精良	
133	東部	第V-2層下部	須恵器 高坏	脚部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
134	東部	第V-2層下部	須恵器 高坏か	杯部				①灰色 ②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
135	東部	第V-2層上部	土師器 坏もしくは埴	底部		(6.8)		①②橙色	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	
136	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部				①②明青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	つまみ径2.3cm
137	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	つまみ径2.7cm
138	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
139	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部	(15.9)			①②明青灰色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	
140	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部	(14.7)			①②灰白色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
141	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部	(14.2)			①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
142	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②灰白色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
143	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②明青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
144	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②灰白色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
145	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
146	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
147	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	
148	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
149	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
150	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①青灰色 ②明青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
151	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
152	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
153	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①灰白色 ②灰黄色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
154	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①褐灰色 ②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
155	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
156	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②灰白色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
157	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①オリーブ灰色 ②緑灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	

出土遺物観察表

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
158	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部～口縁部				①②青灰色	0.5～4.0mmの砂粒を少量含む	
159	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部～口縁部				①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
160	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部～口縁部				①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
161	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部～口縁部				①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
162	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部～口縁部				①灰白色 ②明青灰色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
163	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	天井部～口縁部				①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
164	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	口縁部				①②緑灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
165	東部	第V-2層上部	須恵器 坏蓋	口縁部				①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
166	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(7.5)		①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
167	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(9.1)		①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
168	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.3)		①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
169	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(9.1)		①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
170	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.6)		①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を少量含む	
171	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(7.1)		①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
172	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(7.1)		①②青灰色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
173	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.2)		①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
174	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.1)		①②明オリブ灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
175	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.9)		①②青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
176	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.4)		①②緑灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
177	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部		(8.5)		①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
178	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②明青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
179	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②灰白色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
180	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②明青灰色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
181	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
182	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
183	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②灰色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
184	東部	第V-2層上部	須恵器 高台付坏	底部				①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
185	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	底部				①②青灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
186	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5～1.5mmの砂粒を少量含む	
187	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
188	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②オリブ灰色	0.5～2.0mmの砂粒を少量含む	
189	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②灰色	0.5～1.0mmの砂粒を少量含む	
190	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②明青灰色	0.5～3.0mmの砂粒を少量含む	
191	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①青灰色 ②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を少量含む	

第2学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
192	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②オリーブ灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
193	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②明青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
194	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①青灰色 ②緑灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
195	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
196	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
197	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②浅黄橙色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	焼成不良
198	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
199	東部	第V-2層上部	須恵器 坏	口縁部				①②青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
200	東部	第V-2層上部	須恵器 皿か	底部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
201	東部	第V-2層上部	須恵器 臚か	口縁部				①暗青灰色 ②灰白色	精良	
202	東部	第V-2層上部	須恵器 器種不明	脚部				①②明青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
203	東部	第V-2層上部	須恵器 長頸壺か	胴部				①②灰色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
204	東部	第V-2層上部	須恵器 長頸壺か	胴部				①灰色 ②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
205	東部	第V-2層上部	須恵器 甕	頸部				①②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
206	東部	第V-2層上部	須恵器 高坏	脚部				①②緑灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
207	東部	第V-2層上部	須恵器 高坏	坏部				①②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
208	東部	第V-2層上部	須恵器 高坏か	坏部				①②明オリーブ色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
209	東部	第V-2層上部	陶器 不明	口縁部				①②褐灰色	精良	
210	東部	第V-2層	縄文土器 深鉢	胴部				①浅黄色 ②淡黄色	0.5~7.0mmの砂粒を少量含む	
211	東部	第V-2層	土師器 坏もしくは壺	底部		(6.85)		①②浅黄色	0.5~7.0mmの砂粒を多く含む	
212	東部	第V-2層	土師器 壺	底部		(5.3)		①②灰白色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	
213	東部	第V-2層	土師器 壺	底部				①②灰白色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
214	東部	第V-2層	土師器 甕	口縁部				①②橙色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	
215	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	天井部				①②明青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	つまみ径2.4cm
216	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	口縁部	(14.3)			①②灰色	0.5mmの砂粒を少量含む	
217	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	天井部				①灰色 ②灰黄褐色	0.5mmの砂粒を微量に含む	
218	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
219	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	口縁部				①灰白色 ②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
220	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①暗青灰色 ②青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
221	東部	第V-2層	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①灰色 ②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
222	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部		(7.8)		①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
223	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部		(8.0)		①②灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
224	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部		(5.2)		①淡黄色 ②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	焼成不良 他器種である可能性あり
225	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部		(8.2)		①②灰白色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	焼成不良

出土遺物観察表

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
226	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部		(7.6)		①②灰白色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	焼成不良
227	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部		(7.7)		①②灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
228	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部		(6.0)		①②灰白色	0.5mmの砂粒を少量含む	焼成不良
229	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部				①②青灰色	0.5~2.5mmの砂粒を少量含む	
230	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部				①②緑灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
231	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部				①②灰黄色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	焼成不良
232	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部				①②青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
233	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部				①②灰色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
234	東部	第V-2層	須恵器 高台付坏	底部				①暗青灰色 ②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
235	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部				①②青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
236	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
237	東部	第V-2層	須恵器 坏	底部				①②灰白色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
238	東部	第V-2層	須恵器 坏	口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
239	東部	第V-2層	須恵器 坏	口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
240	東部	第V-2層	須恵器 壺か	底部		(8.3)		①②灰白色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
241	東部	第V-2層	須恵器 甕	口縁部				①②灰白色	0.5mmの砂粒を少量含む	
242	東部	第V-2層	須恵器 高杯	口縁部				①②灰色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
243	東部	第V-2層	須恵器 高杯	口縁部				①②明青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
244	東部	第V-2層掘削後清掃時	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部	(15.0)			①暗青灰色 ②青灰色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	
245	南東部	床面清掃時	須恵器 坏蓋	天井部				①②緑灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	つまみ径1.3cm
246	南東部	床面清掃時	須恵器 坏蓋	天井部				①②緑灰色	精良	つまみ径2.3cm
247	南東部	床面清掃時	須恵器 坏蓋	口縁部				①②青灰色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
248	南東部	造成土	須恵器 高台付坏	底部		(6.9)		①②灰白色	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	
249	南東部	造成土	須恵器 坏	口縁部				①②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
250	北東部	造成土	須恵器 坏蓋	天井部~口縁部				①②灰色	0.5mmの砂粒を微量に含む	つまみ径2.45cm
251	南東部	攪乱埋土	須恵器 高台付坏	底部		(8.6)		①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
252	機械掘削時		須恵器 高台付坏	底部				①青灰色 ②暗青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
253	機械掘削時		須恵器 坏	口縁部				①②青灰色	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	
254	機械掘削時		磁器 碗	口縁部~胴部				素地 灰白色 釉 灰白色	精良	肥前系
255	東部	第V-2層表探	須恵器 高杯	口縁部				①②灰白色	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	
256	排土表探		須恵器 高台付坏	底部		(10.8)		①②褐灰色	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	

Tab.9 出土遺物観察表(土製品)

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	法量 (cm, g)	色調	胎土	備考
64	SD1-3区	中層	管状土錘	最大長6.2、最大幅2.15、孔径0.6、重量21.59	浅橙色	0.5~2.5mmの砂粒を少量含む	

第2 学生食堂の増築及び改修工事に伴う発掘調査

Tab.10 出土遺物観察表(石器・石製品)

遺物 番号	出土地区・ 遺構	層 位	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 質	備 考
257	SB2-Pit370		砥石	8.85	7.4	6.86	682.2	花崗斑岩	被熱
258	SD1-4区	下層	石鏃	1.14	1.13	0.3	0.39	流紋岩	
259	SD1-3区	下層	石鏃	1.5	1.47	0.25	0.46	流紋岩	
260	SD1-2区	下層	石鏃	1.64	1.47	0.36	0.6	流紋岩	
261	SD1-4区	下層	石鏃	1.9	1.05	0.28	0.53	安山岩	
262	SD1-3区	下層	石鏃	2.12	1.55	0.3	1.32	流紋岩	
263	SD1-2区	下層	石鏃	3.17	1.76	0.67	3.14	流紋岩	
264	SD1-2区	下層	石鏃	1.11	1.0	0.15	0.17	流紋岩	
265	SD1-2区	下層	石鏃	1.74	1.49	0.32	0.63	流紋岩	
266	SD1-2区	下層	石鏃もしくは 石錐	1.3	1.21	0.38	0.54	安山岩	
267	SD1-2区	下層	石鏃もしくは 石錐	1.46	1.26	0.35	0.71	安山岩	
268	SD1-2区	下層	石錐	1.66	1.22	0.3	0.57	流紋岩	
269	SD1-4区	下層	敲石	13.8	6.7	3.77	374.49	石英斑岩	
270	SD1-4区	下層	敲石	6.1	6.1	5.5	308.2	流紋岩	正面を中心に全面を使用
271	SD1-2区	下層	砥石	6.75	5.95	4.26	290.42	石英斑岩	被熱
272	SD1-3区	下層	砥石	12.93	9.75	4.2	629.0	珪長岩	
273	SD1-3区	下層	石鏃	11.42	4.79	1.1	92.82	緑色片岩	
274	SD1-3区	中層	石鏃	1.72	1.51	0.51	0.89	安山岩	
275	SD1-2区	中層	石鏃	1.8	1.61	0.27	0.65	流紋岩	
276	SD1-3区	中層	石鏃	1.74	1.49	0.32	0.63	流紋岩	
277	SD1-4区	中層	石鏃	1.8	1.5	1.28	0.77	流紋岩	
278	SD1-3区	中層	石鏃	1.12	1.39	0.27	0.38	流紋岩か	
279	SD1-2区	中層	石鏃	1.45	1.1	0.42	0.58	黒曜石	姫島産
280	SD1-4区	中層	石鏃	2.15	1.75	0.37	1.22	流紋岩	未製品
281	SD1-1区	中層	敲石	6.2	6.2	5.25	217.02	石英斑岩	
282	SD1-2区	中層	台石	13.85	7.2	9.05	1171.8	石英斑岩	
283	SD1-2区	中層	石庖丁	4.1	3.1	0.46	5.69	緑色片岩	
284	SD1-4区	上層	石鏃	1.08	1.04	0.13	0.18	流紋岩	
285	SD1	上層	石鏃	1.68	1.12	0.29	0.36	流紋岩	
286	SD1-2区	上層	石鏃	1.86	1.56	0.47	0.86	流紋岩	
287	SD1-1区	上層	石鏃	1.23	1.18	0.22	0.37	流紋岩	
288	SD1-4区	上層	石鏃	13.0	6.03	2.85	249.68	雲母片岩	

出土遺物観察表

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
289	SD1-2区	上層	石庖丁	3.18	3.25	0.4	5.3	輝緑岩か	
290	SD1 南側	清掃時	石鎌	1.46	1.0	0.29	0.27	流紋岩	
291	SK13		石錐	1.55	1.25	0.31	0.49	流紋岩	
292	SX1		砥石	12.2	6.55	2.65	350.0	玢岩	敲打痕あり
293	SX2		石鎌	1.68	1.58	0.26	0.58	流紋岩	
294	SK12		石鎌	1.45	1.19	0.2	0.39	流紋岩	
295	SK12		石錐	1.25	0.98	0.28	0.26	安山岩	
296	西部	第V-1層	石鎌	1.91	1.9	0.66	2.04	流紋岩	
297	東部	第V-2層 下部	石鎌	1.58	1.45	0.22	0.34	流紋岩	
298	東部	第V-2層 下部	石鎌	1.68	1.33	0.31	0.62	黒曜石	姫島産
299	東部	第V-2層 上部	石鎌	1.32	0.81	0.27	0.32	安山岩	
300	東部	第V-2層 上部	石鎌	1.33	1.28	0.23	0.32	流紋岩	
301	東部	第V-2層 上部	石鎌	1.65	1.16	0.32	0.46	黒曜石	姫島産
302	東部	第V-2層 上部	石鎌	2.43	1.88	0.3	0.95	流紋岩	
303	東部	第V-2層 上部	石鎌	1.8	1.7	2.27	0.75	流紋岩	
304	東部	第V-2層 上部	石鎌	1.93	1.65	0.28	0.72	流紋岩	未製品
305	東部	第V-2層 上部	石核	3.85	2.80	2.21	17.12	黒曜石	姫島産
306	東部	第V-2層	石鎌	1.89	1.38	0.43	0.9	流紋岩	
307	東部	第V-2層	砥石もしくは 石皿	13.22	11.05	4.44	995.6	黒雲母花崗岩	被熱
308	東部	第V-2層	石斧	9.35	4.62	2.98	135.18	砂岩・泥岩の 互層	
309	西部	遺構 検出時	石鎌	1.47	1.06	0.22	0.27	安山岩	
310	東部	床面 清掃時	石鎌	1.35	1.47	0.27	0.44	流紋岩	
311	南東部	遺構 検出時	石鎌	1.35	1.6	0.22	0.42	安山岩	
312	西部	床面 清掃時	用途不明 石製品	2.25	3.15	0.49	3.29	砂岩	
313	東部	第V-2層 表探	石鎌	1.6	1.35	0.24	0.5	流紋岩	

Tab.11 出土遺物観察表(鉄製品・鉄滓)

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
314	SD1-3区	下層	鉄釘	7.7	0.92	0.8	6.96	保存処理済
315	SD1-1区	下層	鉄斧	7.5	4.6	2.41	125.42	保存処理済
316	SD1-1区	下層	鉄滓	4.53	3.07	2.34	47.34	保存処理済
317	東部	第V-2層	不明	3.25	0.78	0.34	1.99	保存処理済

第2節 立会調査

調査地区 吉田構内 N・O-15

調査期間 平成11年5月6・11日

調査面積 約250.9㎡



Fig.69 調査区位置図

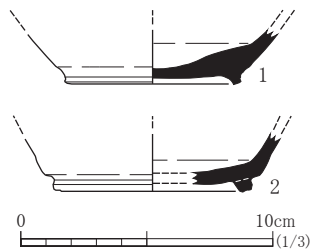


Fig.70 出土遺物実測図(土器)

調査結果

平成11年5月の追加調査中に行われた掘削工事に伴い、立会調査を行った。A・B地点は排水管接続箇所である。A地点では現地表下58cmまで掘削したが、水田耕土を検出するにとどまった。B地点では現地表下30cmまで掘削したが、全て造成土の範囲内であった。

C地点は擁壁構築箇所、北から南へ法面をつけて掘削された。ほとんどの箇所は削平を受けていたが、北東隅で第V-2層を検出し、土器片1点、弥生土器底部片1点、須恵器坏底部片2点 (Fig.70-1・2)、石核1点が出土した。

Tab.12 出土遺物観察表(土器)

法量()は復元値

遺物番号	出土地区・遺構	層位	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 ①外面②内面	胎土	備考
1	C地点 北東端	第V-2層	須恵器 坏	胴部～ 底部			(7.0)	①②灰白色	0.5～1.0mmの砂粒を 少量含む	
2	C地点 北東端	第V-2層	須恵器 坏	胴部～ 底部			(7.9)	①②灰黄色	0.5～2.0mmの砂粒を 少量含む	